

保存用

経済技術協力

書出禁止

# メコン河開発の調査と計画

アジア協会

JICA LIBRARY



1047025[0]

経済技術協力叢書 V

メコン河開発の調査と計画

アジア協会

国際協力事業団

受入 月日	'84. 5. 24	100
登録No.	074,308	61.7
		AS

## は し が き

遠くチベットに源を發し、雲南高原を南下して、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムを流れて南支那海にそそぐメコン河。悠々四、二〇〇キロを流れ来たり流れ去る大河メコンは、世界では第一〇位、東南アジアでは最大の河川である。流域八〇万平方キロ、そのうち下流デルタ地帯の七万平方キロはゆたかな穀倉となっている。

だがモンソンの影響下にあるこの地方は、夏の三カ月が雨期にあたり、ヒマラヤの雪どけと合して、メコンの濁流を氾濫させる。乾期には容赦なく照りつける陽の下に河水は瘦せ細り、水位の差は実に一〇メートル。氾濫は洪水被害とともに沃土をもたらすが、干害は広漠たる土地を不毛の原野と化している。この凶暴な野性動物にも似たメコン河をいかにして飼ひ馴らすか。ここに洪水防禦と灌漑をめざすメコン開発の一つの目標がある。

乾期の減水にもかかわらず、膨大な水量を擁し、好適な落差をもつメコン河は、水力発電の無限の宝庫ともいえよう。ここに開発のさらに大きな展望がひらけている。

なお岩と滝と急流を制御して水運の便を進め、農林、水産、鉱工業など流域の經濟發展をはか

り、さらに下流の塩害を防止することまで含めると、メコン河開発はきわめて多彩、多目的であるといわねばならない。

太古のままに生き、まだ科学のメスを入れられなかったことのないメコン河。その開発計画は、国連アジア極東委員会によって樹立された。一九五一年、ラホールで開かれたエカフニ総会で承認され、五、六年に第一回調査が行われている。ついで五七年にはアメリカのホイラー調査団が現地で作業し、レポートをつくった。一九五九年一月からは日本調査団一五人が活動を開始したのである。

機上で一万キロ、地上で七、〇〇〇キロ、踏査河川の合計三四という精力的な作業の結果、貴重な報告書と開発計画の諸構想が生れた。この間終始、第一線に立ってメコン開発と取組んできた久保田豊氏（メコン河支流日本調査団団長、日本工営株式会社社長）と、安芸皎一氏（科学技術庁審議官）の報告および解説、さらに日本調査団に同行した白木竜雄氏（朝日新聞記者）の記録を本篇にまとめた。

メコン河開発はタイ、ラオス、カンボジア、ベトナムという流域諸国はもとより、日本その他の国連諸国の協力による「国際開発」の輝かしい先例となろうとしている。だが河水の利用そのものをめぐる経済的対立のほかに、諸国間の政治的、社会的矛盾など解決を要する問題が少なくない。

また新しい農業技術を入れるにあたって、原始のままの素朴な農民のしきたりとどう調和するか。たとえ豊富な電力を生み出したとしても、それを消化する工業化のテンポをいかにして早めるかなど難問が山積している。しかもなお調査に踏み出したことは、開発への第一歩を踏み出したことである。東南アジアの経済発展と生活水準向上のために、メコン河が近代文明の光のもとに開発の成果をあげる日の一日も早きを期待して止まないものである。

昭和三五年一月

社団法人 アジア協会

事務局長 石川 実

目次

はしがき

第一部

久保田 豊

東南アジア水力開発への協力

- 1 日本技術のめざましい協力…………… 1
- 2 バルウチャン地点―ビルマ…………… 2
- 3 ダナム地点―ベトナム…………… 6
- 4 メコン河―タイ、インドシナ三国…………… 8



5 豊かな電力資源を開こう.....19

第二部

久保田 豊

メコン河支流調査の報告

1 メコン河調査のいきさつ.....21

2 日本調査団の作業のあらまし.....25

3 これまでの本流開発計画案.....27

4 日本調査団の開発計画構想.....30

(1) パモン計画 ..... 30

(2) 上流部計画 ..... 33

(3) 支流計画 ..... 34

(4) メコンの包蔵水力 ..... 38

第三部

安芸 岐一

メコン河の国際開発

- 1 十年來の懸案……………41
- 2 国際開発めざして……………45
- 3 微視的な調査研究……………49
- 4 投資効果も考えて……………51
- 5 後進国開発の一環に……………54

第四部

白木 竜雄

メコンの旅……………59

一九五九年一月三日～二月二日

第一  
部

久保田  
豊

## 1 東南アジア水力開発への協力

### 東南アジア水力開発への協力

#### 一 日本技術のめざましい協力

一九五三年以来、筆者は水力技術の分野で東南アジア諸国の開発地点にたいしコンサルタントの仕事が続けているが、その当初に因係し、今日なおその完成に力をつくしているビルマのバルウチヤン発電計画は、日本の技術者による海外における技術協力の先鞭をつけたものであるとひそかに自負している。これは一九三〇年代から北鮮に水豊はじめ幾多のダム・水力発電所を建設して重工業勃興の素地を作りあげて来た技術的経験と、日本の技術を信頼をもって受け入れてくれたビルマ、南ベトナム、エカフェ等の政府機関の要路者の決断と、筆者のスタッフが未開の土地で或いは

ジャングルを打ち開き、或いは艱難辛苦と闘って仕事に挺身した熱意と、その三つが一体となつての成果であることを確信している。

御承知のように、東南アジア諸国は一九世紀の植民地であつて、第二次世界大戦後新たに独立を勝ち得た国が多く、いずれも先進国にくらべ生産性が著しく低く、また主要な産業は農業であるといった現状であるが、筆者は各国のかくれたる資源に着目してその水力を開発し、しかもその国の電力事情にマッチした需要増加の想定と、工場建設の可能性を含めた広範な計画を樹立する構想を各国に勧告して来た。

ここに筆者は自分の関係している諸計画のうち現在継統中であり、かつ一国の経済的発展の基盤たりうる水力地点としてのビルマのバルウチャン、ベトナムのダニム、タイ、ラオス、カンボジア、およびベトナム四カ国にまたがるメコン河の三つの計画について、三者それぞれ開発の規模と段階は異なるが、取敢えずその現状を以下に詳述したいと思ふ。

## 二 　バルウチャン地点　―ビルマー

従来ビルマの開発には、イギリス、インドの技術団が多く参加していたが、戦後はアメリカの

### 3 東南アジア水力開発への協力

KTAM (Knappen Tippetts Abbott McCarthy Engineering Co.) というコンサルティング・エンジニアのグループが、ビルマ国全般の資源調査を分担し、水力開発についても勧告するところがあった。一九五三年たまたま渡欧の途次、ビルマを訪れた筆者が示したバルウチャンの提案は、KTAM の勧告よりも大規模であり実現性に富むという点で、急テンボの復興をのぞむビルマ政府当局の心を捉え、ここに日本技術陣念願の東南アジア進出の糸口がひらけたわけである。一九五四年四月設計契約、その後賠償協定成立で一九五五年四月以降は賠償支払いの一環として工事が行われることになったが、はじめは純然たる商業契約としてスタートしたのであった。

ビルマの水力発電所は全部戦前建設されたものばかりで、合計一〇発電所、設備出力は一七、〇〇〇キロワットに過ぎない。その中で一、〇〇〇キロワット以上のものはボードウィン鉱山（鉛、亜鉛で戦前生産高東洋一）の自家用一〇、〇〇〇キロワット、他は三、〇〇〇キロワット、二、〇〇〇キロワットと三発電所に過ぎず、そのほかは五〇〇キロワットないし三〇キロワット程度の小水力発電所である。これらは大部分が鉱山用に使われていたのであるが、今度の戦争によって破壊され、或いは引続く治安の不安定によって鉱山が休止し、現在稼働しているのは前記ボードウインの二、〇〇〇キロワットの発電再開を含めてもおそらく三、〇〇〇キロワットをこえることはな

いであろう。

火力発電所としてはラングリンの二六、〇〇〇キロワットが一番大きいもので、その他ディーゼル発電を含め、鉱工業、照明用を合せると全国で約七六、〇〇〇キロワット内外である。

ビルマの包蔵水力は従来三百萬キロワットと報告されているが、われわれの图上調査によれば、サルウィン河流域のみで約一、〇〇〇萬キロワットであることが明らかになった。

以上のような現状に対し、ビルマ将来の電力需要の増加は従来の資料によると、一九六一年に二萬三千方キロワットという想定もあつたが、これは現状では過大と思われる。しかしながらバルウチャンの第一期計画の完成によって、一般および産業用ともに需要は飛躍的に増大するであらうことが予期せられる。従つて後にのべる上流貯水池の造成を出来る限り早い時期に行い、その予想される需要増加に備えることが発生電力の経済的効果からいっても甚だ望ましい。

バルウチャン水力開発の構想は次のようなものである。すなわちサルウィン河支流ナムバウンに注ぐ流域面積三、一八〇平方マイルのバルウチャン河が、その上流高原地帯に水源であるインレ湖（湖面積二三、〇〇〇エーカー）をもつほか大貯水池を容易に造成し得る可能性を有し、一方下流部ロイコー付近よりナムバウン合流点までの間には大小いくつかの滝があり、僅か一五マイルの間

5 東南アジア水力開発への協力

第 1 表

発電所名	有効落差(呎)	使用水量(立方呎毎秒)	設備出力(kw)	常時出力(kw)	年間発生電力量(MWH)
第1	224	1,180—1,550	24,000	19,400	183,000
第2	1,390	1,180—1,680	168,000	120,000	1,159,000
第3	377	1,240—1,800	48,000	34,400	331,200
合計	1,991		240,000	173,800	1,673,200

で二、一〇〇フィートの落差が得られるという地形的条件に恵まれている点に着目し、またその上流貯水池としてはモビエ付近に有効貯水容量一、七五〇、〇〇〇、〇〇〇立方フィートのモビエ貯水池を築造し、その貯水池によって調節される水量を利用して、ロイコー下流部分の右岸に、シリーズに発電所を設置し、最大二四〇、〇〇〇キロワットを発電し、これをラングーン周辺の需要地およびマンダレー方面の将来の工業地帯に向けて送電する計画である。

各発電所の概要は上表の通りである。

以上の計画のうち第一期工事は、第二発電所の半分である八四、〇〇〇キロワットの発電所建設工事と、これに平行して延長約五六〇マイルの送電線工事、延長約一三〇マイルのトンダー・ロイコー道路(送電線架設のための道路)新設工事ならびに延長約一〇〇マイルのアンバン・ロイコー道路(資材輸送のための道路)補修工事が政府の直営工事として筆者と筆者のスタッフの監督のもとに実施中である。



## 三 ダニム地点 — ベトナム —

従来南ベトナムはフランスの植民地であった関係上、フランスの技術団体が開発に参画していた。このダニム地点は稀に見る好条件を備えた発電地点であり、ダニム河の水を五キロ程度の水路で流域変更すれば八〇〇メートルの落差が一举に得られるというところから早くから注目せられ、三〇年来フランスの技術団体による幾多の開発計画とそれを根拠づける調査資料が明らかにされて今日に至ったものである。しかも第二次世界大戦中には日本の技術者によって調査せられた地点でもあった。最近におけるフランス側の最終案とも称せられるものは EDF (Electricite de France) のダニム上流クロンクレに貯水池を造成する計画案であった。

一九五五年たまたま南ベトナムを訪れた筆者は、ゴ大統領にダニム地点開発に関する構想を開陳する機会を得た。その結果その構想が政府に取上げられ、調査設計に対する契約が成立するに至った。筆者は与えられた期間にダニムを含むダドン河上流地帯を広範に調査し、南ベトナムの産業開発に必要な良質低廉な電力を供給する目的で長期の開発計画を立案した。一九五七年当初、筆者の提案になる設計と EDF による最終設計が南ベトナム政府の依頼する国連技師団の手により審査せ

## 7 東南アジア水力開発への協力

られ、幸いその提案が採用せられる気運にあった。

サイゴン地方の既設発電所は、すべて火力発電所で、その設備容量は六〇、〇〇〇キロワット程度、最近五カ年間の平均年間需要増はキロワット時で一三・一%、キロワットで一四・二%である。筆者の想定では一九五八年直ちに着工したとしても、第一期八〇、〇〇〇キロワットをサイゴン地区へ送電することによる重工業方面の需要増のため、直ちに第二期八〇、〇〇〇キロワットが着手せられねばならないという見込みである。

筆者のダム開発の構想は、標高九〇〇メートルのダラット高原を南下してダドンに合流するダムおよびダドン本流およびそれに平行して流れる小支流に着目し、それらの流れを含む約二、〇〇〇方キロにおよぶ流域の水を貯水池・揚水所の組合せによりドラン貯水池に集水して、これを約五キロのトンネルによって東方クロンファ平原に流域変更して三発電所を建設し合計五〇〇、〇〇〇キロワットを発電、これをサイゴン周辺の需要地およびカムラン湾沿岸の将来建設を予定されている工業地帯に送電しようとするものである。造成される貯水池は六つ、その総貯水容量は五億二〇〇〇万立方メートルに及び、二、〇〇〇方キロの流域の流量を補って常時毎秒四八立方メートルまで発電所に供給することになる。

第 2 表

発電所名	使用水量 (m <sup>3</sup> /S)		有効落差 (m)	設備出力 (kw)	常時出力 (kw)	年間発生電力量 (MWH)
	最大	常時				
第1	68	48	718—738	400,000	295,000	2,600,000
第2	70	48.5	100—105	58,000	43,000	380,000
第3	70	46	72—78	42,000	30,000	260,000
合計				500,000	368,000	3,240,000

発電所の概要は上表の通りである。  
 本計画は送電線を含めて一億四、〇〇〇万米ドルで完成される見込みであり、その電気料金は〇・三セント程度の世界で最も低廉な電気を供給することになるであろう。

以上の全体計画の観点に立ってドラン貯水池を造成して八〇、〇〇〇キロワットの第一発電所を建設する第一期工事と、さらにドランの堰堤嵩上げによって八〇、〇〇〇キロワットを増設する第二期工事を当面の問題として取上げ、この工事が将来の大開発をさまたげることなく、合理的な需要増加の速度に応じて逐次進め得られるように設計を準備して早期の着手を勧告している。第一、第二期を合して工事費は五、一〇〇万米ドルであり、まさにこの国の現状に最もふさわしい計画を提示している。

#### 四 メコン河 — タイ・インドシナ三国 —

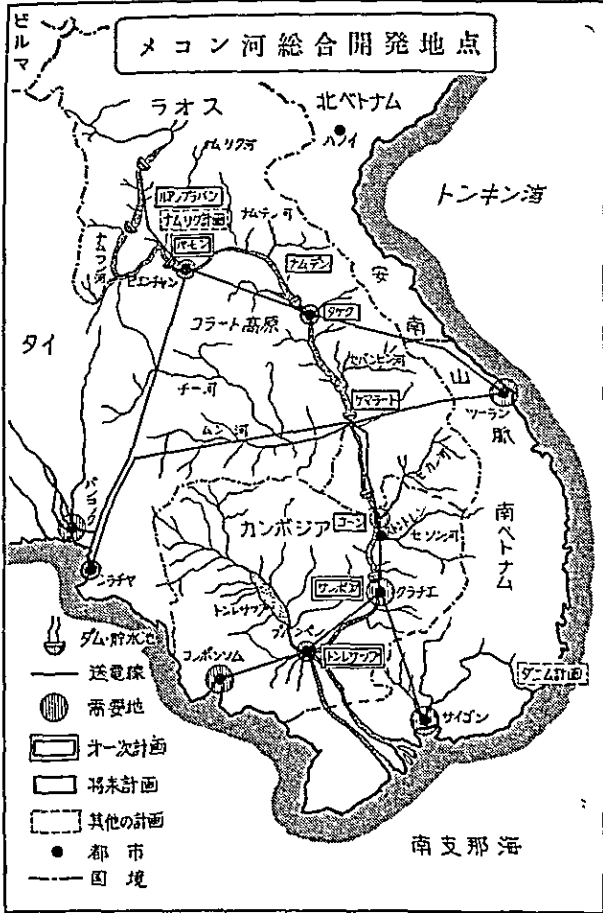
かねて国連アジア極東経済委員会（エカフェ）では、その担当域内の国際河川の治水問題を技術的に研究することを議決していたが、まず最初にインドシナ半島を縦貫するメコン河を探り上げることになった。そこで一九五六年四、五月の両月にわたって現地調査団を派遣することになり、求められて筆者はこれに参加した。調査団は日本二、インド二、中国、フランス、オランダ各一名より成る七名で、各員は発電、灌漑、洪水調節、農林、舟運、水理、地質の専門の立場より調査した成果を持ち寄って検討し、開発計画の大綱を結論した。その結果は一九五七年三月バンコックで開かれたエカフェ総会に「メコン河下流々城開発計画」(“Development of Water Resources in the Lower Mekong Basin”)として公表された。これに対し下流々城に関係あるラオス、カンボジア、ベトナムの四カ国は、本問題の速やかな推進を望む共同声明を出し、アメリカ代表は開発資金を、またフランス、日本およびインド代表は開発技術をそれぞれ援助する用意ある旨発言した。その後右の關係四カ国は本問題に関する常置委員会を作って、二カ月おき位に会合を開き、筆者も時々コンサルタントとして招かれて列席した。この委員会では第一次の開発地点を定め調査は共同で行うこと、また調査費の援助を要水することが議決された。第一次開発は關係各国への利益均霑の見地から後述する三地点を定めた。援助要請としては、まずこの三地点を正確に測量調査してブレデ

ザインを作り、これにより金融その他の素地と事業計画を作るもので、その費用は約三〇〇万ドルと見積られている。これはエカフェを通じて国連の技術援助資金と各国の援助を要請することに決定した。各国からの援助としては、アメリカの他にフランスと日本とに協力を求めたいといっている。このほかにもカナダとイギリスが進んでこの計画に参加したい意向を示した。こうした情勢から日本も技術援助のみならず、調査資金の一割位を出すべきだと筆者は信じ、当路に進言した。

一方国連の技術援助局ではエカフェの提案に応じ、世銀の顧問技師ホイラー氏に依頼して、三カ月にわたり現地でも本計画を検討することになった。筆者は計画の説明者として任命され、現地に赴いてこの調査団に加わった。さて次にメコン河の現状とその開発計画を紹介して見よう。

メコン河はその源をアジア大陸の屋根といわれるチベットに発し、雲南を経てビルマの北辺をかすめ、ラオス国の北部山地を貫いてラオスとタイの国境を流れ沿岸に小平野を拓きつつカンボジアの大平原に出て、これを横断して遂にベトナム西部において南支那海に注ぐ。その延長四、二〇〇キロにわたりアジアでは揚子江につぐ大河である。流路の大部分が縦谷として流れるので長さの割合に流域面積は小さいが、それでも約八〇万方キロに及び、現在の日本の領土の二倍以上に達する。今回開発の対象としている下流々城というのは、ラオス国ビエンチャン付近より下流を指しそ

11 東南アジア水力開発への協力



の延長、一、六〇〇キロ、流域面積約五〇万方キロである。(長さは青森—熊本間、広さは日本領土の一・三五倍)この区域は大体山地(標高二〇〇メートル以上)、高原地区(標高一〇〇〜二〇〇メートル)、メコン平野(標高一〇〇メートル以下)およびメコン・デルタの四地域に分けられる。山地、高原地帯は主として古生層、中生層を下刻して兩岸に岩盤を露出している(平均河川勾配一万分の一)。後述の計画地点であるサンボア付近から下流は、洪積層、沖積層より成るメコン平野となり、前記の古期岩層を浸蝕してきた砂・シルトを盛んに沈積して随所に淺瀬を作り、また河口には長さ三〇〇キロに近い大三角州を作っている。この間の河川勾配は約七万五、〇〇〇分の一、すなわち濁水期にはサンボアより上流では岩床が瀬を成し、下流では堆積砂が州を作って、いずれも舟運を阻害する原因となっている。

雨量は場所によって異り、タイ湾付近の南西部エレフアント山脈および安南山脈の一部が、年間四、〇〇〇ミリ、ユラート高原、トンレサップ付近とメコンデルタ地帯が一、五〇〇ミリ以下となっている。しかもこの地域はアジア季節風帯に属しているためいわゆるモンスーン気候を示して一年が乾期と雨期に分れ、右の雨量の大部分が五月—十月の六カ月間に降り、しかも上流チベット・雲南方面の融雪期にあたるために年間流出量もこの時期に著しく増し、乾季に濁水する。従って

### 13 東南アジア水力開発への協力

年間水位差も最大はクラチェにおいて一六メートル、普通は一〇メートル前後である。流量データは不完全であるが、種々の資料を参酌して計算すると、ブノンベンにおける最渴水年の最低流量は毎秒一、二〇〇立方メートル、毎年の最低一、七〇〇立方メートル、年平均一万一、五〇〇立方メートル、最大洪水量四万立方メートル余である。実際は六〇七万立方メートルの出水があるが、ブノンベンのすぐ上流にあるトンレサップという大湖に洪水量の一部が逆流貯水されるため、二〇三割の出水がこれに調節されてブノンベンにあらわれるのである。

メコン河は平均河川勾配が前述のように極めて緩いにも拘らず、前節に述べた流量変化により渴水期水深は極めて浅く、また豊水期には流速がはやくなるので舟運の便が極めて悪い。現在の状態では渴水期には河口よりブノンベンまで水深四〇五メートル、ブノンベン―クラチェ間一、二〇三〇メートル、クラチェ―サバナケット間一〇二メートルといった程度で、水運についてはブノンベンまでは渴水期で二、〇〇〇トンの船、豊水期に四〇五、〇〇〇トンの船が入るが、これより上流はクラチェまで二〇〇トンの船、それ以上は数一〇トンの船しか溯行しない。ことに河口から六九〇キロの地点で本流に懸っているコーン滝は落差僅かに一〇数メートルであるが、水運を完全に阻害している。こうした水運の不便さは、メコン河流域の産業文化の発達を著しく妨げている最大の原



因といつても過言ではない。

以上に述べたような河状を持つメコン河に対して、舟運の便を改善し、兩岸の平地を灌漑し、水力を開発し、あわせて洪水を調節するいわゆる多目的開発の必要性が大きく要請される。舟運の改善といつても、こうした大きい河に対して、長大な水路を浚渫によって水深を増すことは、殆んど不可能で、それよりも年間流量を出来るだけ調節して、渇水季流量を補給することにより水深を増して吃水の深い船を通すようにすることである。そのため流路中に適当な地点を選んでいくつかの堰堤を築いて、それより上流の浅瀬を水没せしめて水深を増し、下流には調節した水を放流して渇水期の水深を増す。また堰堤地点には、水力発電所とともに閘門を設けて船を上下流に連絡せしめる。幸いこの河は平均河川勾配が緩いので堰堤によって莫大な貯水量が得られ、背水が遠くまで延びるので流量調節並びに発電に甚だ効果的である。発電電力は関連地域の工業化に役立て、舟運によって促進される城内の農林・鉱産資源の開発とあいまって、原材料の供給と製品の搬出を容易にすることが可能となる。

こうした意図のもとにつきのような一連の計画が樹てられた。下流より上流に向かって順次説明を加えよう。

(1) まずこの河筋で初めて岩盤の浅瀬のあらわれるサンボアに堰堤を作って、二三メートルの落差を得て発電し、一方背水をコーン滝の下までおし上げる。この流量調節によってクラチュ下流の砂州の浅瀬を自然の力である程度浚渫し、またこの水をサンボア下流兩岸の広大な平野の灌漑に利用する。閘門によって上げられた船は、貯水池内をコーン滝の直下まで約六〇キロを楽に溯行することが出来る。

(2) コーン滝のすぐ上流に堰を作って五メートル堰き上げ、滝の落差を合せると三〇メートルの落差が得られる。それには数キロの導水路を作って洪水時の下流水位の上昇が影響しない所で発電する。この場合は発電が主となり、水運の改善もあるが周囲の平地が狭いので灌漑効果はあまり多くない。

(3) ケマラート付近はこの河筋でも特に急湍が連続する部分でこれを水没せしめる必要がある。そのため堰堤地点としては、タイ領から流れこむ支流ムン河の合流点下流に地形的に好適の地があるが、元来このムン河はその沿岸にウボンその他タイの町が発達している上に、洪水時の排水が悪いので、合流点の下流を締めると大きい水没を生ずるため、これを避けて合流点より上流に堰堤地点を選んだ。ここで六〇メートル水位を上げると五〇億立方メートルの有効貯水が得られ、

電力の発生と同時に大きい流量調節効果が得られる。この地点は山間部であるために灌漑効果は余り期待出来ないが、背水長三四〇キロにわたり貯水池内の航行がひらける。

- (4) ラオスの首都ビエンチャンの上流狭隘部バモンに堰堤を作つて三七メートルほど水位を上げると、発電のほかにも岸高原に灌漑用水を供給することが出来る。ことに右岸側のタイ領コラート高原は東西南北各三〇〇キロにわたり標高一〇〇〜二〇〇メートルの平坦な地域が水のないままに不生産地として残されていて、この開発はタイ国多年の懸案となつている。バモン堰堤によつて堰き上げられた水をこれに導くと、自然流下によつて極めて広範囲の灌漑に役立てることが出来る。またこの貯水池内とその調節された放流量は、ビエンチャンの上下流にわたり三〇〇キロ間の水運を改善することが出来る。

なお右の他、バモン上流ルアンブラバンの下流に大貯水池を作つて調節量を増し、ビエンチャン下流左岸に合流するナムデン河の流量を調節し、バモン—ケマラートの中間タケクに堰堤をつくる、と、ビエンチャンより河口までの水運が連続して完全に近いものとなる。これらはもとより極めて大規模な開発でこれを一挙に着手するわけにゆかず、関連地域の産業開発と平行して段階的に開発して行くべきことは論をまたない。そこで最初はそれぞれ単独に開発して順次拡張する方式を取る

17 東南アジア水力開発への協力

第3表 メコン河開発計画概要

地点	目的	落差 (m)	発電使用水量 (m <sup>3</sup> /s)	発電設備 (kw)	常時発電力 (kw)	常時発電 電力量 million kwh	工費 million U.S.
下記いずれかをそれぞれ単独に開発する場合							
バクモラソ	P.N.I.F.	37	760	240,000	190,000	1,660	72
ラ	P.N.F.	60	1,435	800,000	585,000	5,100	233
ソ	P.N.	30	1,205	320,000	265,000	2,300	104
ボ	P.N.I.	23	1,405	360,000	235,000	2,030	95
計							
四地点をシリーズに開発した場合							
バクモラソ	P.N.I.F.	37	760	240,000	190,000	1,660	72
ラ	P.N.F.	60	1,535	830,000	630,000	5,500	248
ソ	P.N.	30	1,805	490,000	410,000	3,600	128
ボ	P.N.I.	23	1,905	480,000	360,000	3,150	113
計							
総計							
ルアソ	P.N.F.	80	1,620	1,300,000	950,000	8,400	415
バ	P.N.I.F.	37	1,560	540,000	400,000	3,500	118
ナ	P.I.F.	350	145	530,000	420,000	3,680	83
タ	P.N.	20	2,110	360,000	305,000	2,670	97
ク	P.N.F.	60	2,485	1,360,000	1,010,000	8,850	309
マ	P.N.	30	2,755	770,000	620,000	5,430	176
ラ	P.N.I.	20	2,855	720,000	525,000	4,600	148
ソ	P.N.I.	20	2,855	720,000	4,230,000	37,130	1,346
計							

(凡例) P:発電 N:舟運 I:灌溉 F:洪水調節

べきだと思われるが、それを一括して示したのが第三表である。

また一方最下流部においてさきに述べたトンレサップという天然の遊水池があるが、この湖は渇水期にはメコン河に排水されているが、洪水期には逆流して三六〇億立方メートルの水を流入貯水する。現在は湖水面と河水面との天然の水位差により排水と逆流が行われているが、この入口に堰を設けて豊水期の初期の逆流を阻止し洪水期に水門を開いて逆流させ、また豊水期の終りから渇水期にかけて排水を人工的に調節して出してやれば、ブノンベンより河口にいたる洪水調節に役立つ。渇水期には水運のため流量補給と河口よりの塩水浸入によるデルタ地帯の塩害防止に大いに役立つ。更にまた豊水期初期の逆流を阻止することにより五月―八月の一収穫期だけ湖の周辺の干潟に四〇五〇〇方キロの耕地が活用出来る利点がある。この計画は水位差が少なく、流出・流入量の変化が大きいので発電利用は考えず、流量調節を主目的とし、あわせて下流兩岸の灌漑用水補給を目的とする。

以上で全計画を概観したが、さきにも述べたように関係四カ国に直接利益をもたらすものから優先的に推進することが要請された結果、

#### 1 ラオスとタイに直接役立つパモン地点

- 2 カンボジア平原の産業開発と水運に貢献するサンボア地点
- 3 カンボジア、ベトナムに恩恵をもたらすトンレサップ地点  
の三つが選ばれた。

## 五 豊かな電力資源を開こう

筆者はここ数年の間に実際に手がけることを得た東南アジアの三つの水力開発計画について述べたのであるが、筆者の何回かの旅行にあたって、東南アジア全域には未開発の地下資源や森林資源が無尽蔵に存在し、これらの資源の開発は東南アジアの繁栄の基礎であり、これを開発するための電力がそれらの産業開発の基盤であることを思うにつけ、開発技術の海外協力こそは日本の技術者の当面の問題であり、受益者である東南アジア諸国のためのみならず、日本のためにも望ましいことであると信じている。

筆者が深い関心をよせている水力開発地点として、前三地点のほかに、ラオスのナムリク地点、スマトラのアサハン地点、セレベスのラロナ地点などがあり、すでに計画が進められているタイのヤンヒー地点、フィリピンのマリキナ地点等とともに、有望な水力地点はまさに東南アジア全域を

覆って点在するといっても過言ではないと思う。これらの水力地点は日本の技術協力を得て、それぞれの地域で資源開発の基礎となるであろう。キロワット時当り一円程度の豊富低廉な電力とそれらの資源によって東南アジアが第一次製品加工の場となれば、わが国のエネルギー経済からいってもアジア全体の経済からいっても甚だ好ましい結果を招来するであろう。

久 保 田 豊

(日本工営株式会社社長)

第二部

久保田  
豊



## メコン河支流調査の報告

### 一 メコン河調査のいきさつ

メコン河開発問題が最初に取り上げられたのはかなり前のことである。国連の一つの組織である ECARF (アジア極東経済委員会) で、国際河川の洪水統御、舟運改善を取り上げたのがはじまりである。ことに ECARF は洪水関係では、アジア地域のいろいろな河川を調べて貴重な報告を出している。その際、取り上げられた沢山の河川のうち、六カ国にまたがっているメコン河は、大きな国際河川でもあり、また非常に大きな興味を持ちうるというので、これを特に取り上げて調べて見た。その結果、まず第一段階で洪水調節とナビゲーションをいろいろ考えた。また洪水統御を考

えると、当然電力が副産物として生ずる。

それは副産物というよりも、効果としては主な効果を持たないと事業が成り立たない。また成り立つべきであるということに変わってきたのである。そして一九五六年第一回の ECARFE 踏査隊を出している。私もその一員として ECARFE にとどまって、専門家として参加してきた。その後 IICA でも同じような踏査結果について、非常に面白いということから、重点を下流地域におくことになった。下流地域というのはビルマ国境から下流の地域で、ビルマと中共に入っている区域を上流というように便宜上分けた。これは政治的にあまり拮げると面倒だということで、地形的に分けたものである。そして関係国のラオス、タイ、カンボジア、ベトナムという四カ国が、それぞれ調査をする。つまり国際的に連合した調査団体をつくるという申合せができ、四カ国から委員が出て、これを進めて行くことがきまった。これは国際的に公認された立派な団体になっている。その団体が ECARFE に対して、また国連に対して自分たちは金もなく、技術もない、どうか国連で援助してくれというのがはじまりである。

その問題を取り上げた結果、まず国連ができるだけの調査費用を出そうということを考えた。だが、国連で出せる費用は、当時年二〇万ドル見当のものは技術委員会から出せるとしても、それ以

上のことは困難であるので、これは国連以外の興味を持っている関係国も、応分の金を出して援助したらよからうということになった。アメリカなども当然ICAを通じて関心を持っているから、その他の国の関心を引く意味において参加する。またエカフェで調べたものを検討して、今後どの調査を進めたらいいか、費用はいくらか、期間はいくらかという問題を、別に国連の技術委員会を通じてもう一度検討することになったのである。アメリカの有名なホイラー中將、これは現在運河のクリアリングを担当しているアメリカの工兵隊出身だが、世界銀行の最高顧問である。この人を團長として、私も団員として参加し、フランス、カナダ、インドからの四名が団員になって、一九五七年の暮から五八年の春にかけてもう一回調査をして、ホイラー・レポートと称する技術委員会の報告書を出した。それによると、調査費用は五カ年にわたって一、〇〇〇万ドル近くのものである。それから調査条項としては、この河の水文学的資料が非常に欠乏しており、ことに流量の調査がほとんどない。これらを組織的にやること。それから地形においても、レベリングがどうも十分でない。河口からコンボンチャム付近までしかできていない。それをビルマ国境までやりたい。同時に三角測量などによって地形も明らかにしたい。さらにそれを土台にして航空写真をつくって、平地で二メートル半、高い所で五メートルのコンターの二万分の一相当の重要地点の航空写真を作

りたい。そのほか経済関係についての調査もしたい。農業および地下資源、その他の調査をやつてここに出るであろう電力を、どうしたら利用できるか。それからまた、ここにできるであろう水をどうして灌漑に使つたらよからうかという各種の調査を含めて、そういう計画がなり立つたのである。

それでそのレポートによつて、国連で差し当つて金を出さないということを前提として、フランスは第一番目に六、〇〇〇万フランの観測用の機械を出そうと申し出た。それからアメリカは二〇〇万ドルの金を出して、この観測作業と観測を引き受けよう。それからニュージーランドは、測量用船を出そうということがまず決まつた。日本でも応分の金を出す。また実際東洋でそういうことのできるただ一つの国であるから、費用とともに、人間も出すように考えてくれと要求された。だが不幸にも三三年度の予算はうまく行かず、なんとかやり操りして、日本政府が補助団体をしてやらせる、結局は日本から金を出してやることになつた。ようやく三四年の暮の四カ国会議にこのことを申し出て、ECAFEの好意により日本のために取っておいてくれた支流の調査という一項目を、三カ年にわたつて二四万ドルでやることが受け入れられた。実際には支流が非常に面白いので、この点については、むしろほかの援助国が多少いやみをいって羨ましがっているくらいである。

その後、英国が二万ポンド、オーストラリアが一〇万ポンド、フランスは追加の五〇〇〇万フラン、カナダが航空写真の全作業を引き受けるというようになっていく。またこの技術委員会の経済援助基金が年に相当の金額を集めることになっていくが、今のところ、おそらく五〇〇万ドルくらい出してくれるであろうということで、ほとんど全額調達できそうな形勢になっている。日本としては、わずか二四万ドルくらいで、ともかく声をあげることができたというのは、非常な仕合わせというべきであろう。

## 二 日本調査団の作業のあらまし

そこでこの日本の提案が入れられると、直ちに日本政府は調査団体を組織して、私はじめ一四人の団員が決定した。その会議のすんだ翌日から、各国と接触して、調査日程その他を進め、一九五九年一月三十一日にサイゴンに集結した。飛行機をチャーターして、各国の関係者と ECARF の関係者など三〇人あまりの者が、サイゴンを出発、まず第一にブノンペンに向い、トンレサップの周辺を見て、ブノンペンに一泊。それからメコン本流沿いに上り、スレポックという大きな支流と、その上流部およびセサンを回って、ベトナムのツアーランに一泊。次に、セコンという支流を下って、

セドンという支流を回りベトナムのユエに一泊。ナムデンやタイ北部を回り、ラオスのビエンチャンに途中着陸して、メコン本流を飛んでビエンチャン一泊。翌日は上流の各支流を回り、ビルマ国境まで行って、五日間正味三七時間、一万キロにわたる飛行機による踏査を終った。この飛行機のキヤブテンのバイロットは優秀なフランス人で、一〇年以上もこの地方に通じた人であった。こちらの希望した全地域を、非常によく回ってくれ、また指図に従ってくれたので、飛行機では大体しか見れないと思ったのが、意外に効果があがった。ここにダムサイトがありはしないかと、あらかじめ用意したところがすっかり見られ、十分効果をあげたといっていると思う。

その後、ビエンチャンを中心に、タイ北東部を回り、ふたたびラオスに入って、非常に興味ふかい地域に入り、それから南下して多くの支流地域を回ってスタントンで二班に分かれて、一つはタイを横切り、一つはカンボジアを横切り、あとでバンコックに集り、ECAPに報告し、またタイ政府と打合せをし、予備報告書を作った。ここで大部分の者は日本へ直接帰り、一部分の者は見残して来た所をふたたび回って調べ、また一部の者はベトナムに入ってセサンの上流を見て、二月の末から三月の初めに、一応全団員帰ってきた。その調査報告書を起草し、また二回目の今後の調査の方法、プログラムやスケジュールや場所、その他いろいろのものを、今後どのようにするかとい

うことを提示して、三四年六月中旬ベトナムのダラットで行われる四カ国会議に提案し、ディスカッションを経て、次の仕事に移るといふ順序になっている。

### 三 これまでの本流開発計画案

メコン河の源はチベットに発して、長さが四、三〇〇キロ、世界で一〇本の指に折られるような大河川である。流域面積が約八〇万平方キロ、日本の倍以上の面積を持っている。水の量も年平均一萬秒トンに近い量を持っており、洪水量も一番多いのはトンレサップ湖で調節する関係上、その上流のクラチェ付近で七萬秒トン、あるいはもっとあるかもしれないという程度である。

河の勾配は河口から三〇〇キロ以上のブノンベンの上流のコンボンチャムまでの潮の干満の影響を受けている。クラチェの上流は岩が出て急流になっており、船の交通が困難である。上流にコーンという滝があるが、水位によって滝の高さがちがって、一二〜一三メートルないし一八メートルくらいの滝とみられる。

その上流でタイから流れるムーン河という支流との合流点、ここにまた大きなラビッド（急流）があり、またその上流にもラビッドがある。こういうラビッドを征伐しない限り船は通れない。非

常にゆたかな資源を持っているけれども、船は一年のうちに数カ月はこういう点を通るが、ラビッドで積みかえて難儀をしながら、船が部分部分に通るということである。舟運ができれば非常によくなるであろう。

洪水調節からいうと、いたるところに洪水が氾濫し、ことにメコンの下流はさんたんたる洪水の場所であるが、また一方、洪水が泥を持ってくるから、肥料になる。稲を植えておけば、だんだん背伸びして、そうして浮き稲となり、穂だけ浮いて実を結ぶ。「だからいいのだ、下手に洪水調節してくれて、そういう方法をあまりかえてくれちゃ困りやせんか」というおかしな話もあるくらいに変わった河である。

ECAREで報告した結果は、まずこのなかの重要な地点として、ピエンチャンの上流のバーセンというところにダムを一つつくる。それからケマラートというこの急流を征伐するために、ここへちょっとしたハイダムをおく。コーンの滝はその上に小さい堰を造って分流する。また滝の下にダムを追って、滝をおっかぶせてしまうか、また滝のすぐ下においたのでは、水位が狭いところで変化するので、よほど遠方まで水路を持っていかないと安定しない。いっそのこと閉めてしまえということにもなる。



それからクラチエの上流のラビッドを征伐するという目的でダムを作る。これをサンボー地点と呼んでいるが、この四つの地点、それからカンボジアには大きなトンレサップという湖があるが、これは低水位で三、〇〇〇平方キロ、洪水期には一萬平方キロも水没するので、ここに堰を造って、五月頃から逆流する水を止めると、大水が出るのは八月の末か九月だから、そのとき水門をあけて、水を入れる。それまでは自分だけの水をためる。洪水のとき一二〜一三メートルほど水位が上るのだが、たまり放題にためても四〜五メートルしか上らんだらう。あと七〜八メートルというのは、ともかく八月はじめまでは水がつかないということであると、これから六、〇〇〇平方キロ、五〇〜六〇万町歩の新しい開田ができるだけでなく、水がたまったら、これを閉めてしまつて欲しいだけ出してやるということになると、この河のナビゲーションがよくなる。メコンのデルタの一部は、この間利根川で問題になつたように、水が少いと塩水が入って、非常に広い地域に対して塩害をこうむっている。そういう押し流しも行くだろうという五つの計画をあげているが、そのうち四カ国がはげしい議論をした結果、まず一番下流サンボーを閉めて、ともかく滝まで、あるいは滝も含めて第一順位にやつてくれ、そうすれば交通がよくなる。それに、カンボジアのトンレサップとメコンの最上流のパーセンを閉めて、この交通をよくするとともに、この南のタイ側はコラート平原

という旱害地帯に水が欲しいということから、三つとも同順位で、三つの地点が第一順位だということをお四カ国が申合せをしたのである。その後、ホイラー・ミッシェンが調べたところによると、これにはどういふポテンシャルがあつて、効力があるということをはっきりいふにはまだ少し早い。だから急いで基本調査をしようということになつて、一応これはお預けをくつた形になつてゐる。

その後調査の進行につれて、ようやくこの頃完成した図面は、米軍でこしらえた二五万分の一、タイの北東部の地域では五万分の一、カンボジアでも一部一〇万ないし五万分の地図ができてゐる。一番われわれの興味があるメコン河の東側は、なにもないというふうな状態だが、五年、一〇年するうちには地図も完備するだろうと思われる。

#### 四 日本調査団の開発計画構想

##### 1 パーモン計画

このような困難な状況にもかかわらず、いくつかの計画を考えてゐる。電力のことをいうと、最初の計画では五〇〇万キロワットぐらいの安い電氣ができるだろうということであつた。いまの段階

では、こういう姿になるであろうということをのべると、やはり支流といっても、本流の計画が影響するので、まず本流計画、支流計画を合わせて非常に興味深いのはピエンチャンの上流のパーセンである。これは標高二〇〇メートルまでせき上げる予定であったが、それを阻む主な原因は兩岸に二〇〇メートル以上の山があるかどうかわからないということと、上流のセンカンの鉄鉱石鉱山を水没させるのは不得策と思つたからである。その後の調査によると、二四〇〜二五〇メートルまでは兩岸は大丈夫だし、センカンも大丈夫だということになった。うんと高い八〇メートルくらいのダムを造ると九〇〇億トンぐらいたまる。そのうち三〇〇〜四〇〇億トンを、一〇数メートルのドロウダウンで取ると、パーモンの南にあるナンセンという支流の流域に水が流れることになってしまう。さらにまたその南のナンボンという河にもはいることになるが、ここはいい土地でもあるし、水没さすにはしのびないという日本調査団の考えとして、ここに小さいダイクをおいて水をとることを考えたらどうか。その前提として、まずナンモンとナンボンに小さいダムを築いて、せっかく大事なところだから水をためる。洪水の損害もあるので、この二つくらいのダムで、一部洪水をおさえる。それから水が非常に足りないので、パーモンのダムの水を回す。これができたらそれをさらに遠く水路でもっていくこともできるかどうか、研究しようと思つている。パーモンの水

がどれ位あるかは、三三年からタイ国政府でパーモンから下流のノンカイで流量を一年間完全にはかつており、流量カーブもできそうになっている。三三年から三四年にかけては旱害の年であったが、大体ここで年平均三、二〇〇秒トンくらいの水が出る。一カ年一、〇〇〇億立方メートルあまりの水が出ることがわかっており、そのほか従来の水位の表があり、多いときはどれ位、少ないときはどれ位とおぼろげながらパーモンの流量がわかるようになってきている。そういうことを土台にして、この一カ年の流量くらいここにたまるのだが、常時二、五〇〇秒トンくらい取れる。濁水流量は七〇〇秒トンくらいしかないが、一、八〇〇〜二、〇〇〇秒トン近くもこの貯水池によって、濁水量が増えるから、沿岸に少くとも五〇〇秒トンくらいは取ってもいいだろう。ことによったら、もっと取れるかもしれない。これは国際問題だからラオスとタイと五〇〇秒トンずつ折半で、それだけいらぬ国は相手に水を売ってしまえという冗談をいってるのだが、そうするとタイ国の分け前は五〇〇秒トンはある。五〇〇秒トンくらいならば、大きな水路でも一応問題になりうる。これが一〇〇秒トンや二〇〇秒トンで、こんな長い水路をつくったらとてもベイしないが、大量生産で大きくやればキャネルが安くなるだろうというようなことを、この国に提案しているが、この計画は大へんうけている。

そしてパーモンの電気を考えると、三、〇〇〇秒トンあまりの水、八〇メートルの落差で二〇〇万キロワットあるいは二五〇万キロワットも設備できるであろうことになる。土木工事がいくらかかっても、コンクリートをざっと勘定して三〇〇万立方メートル、コンクリートがどんなに高くかかったとしても一億五、〇〇〇万ドル程度だろう。発電所も二億ドルとか、三億ドルかかるとして、仮りに全部で五億ドルかかっても、二〇〇億近い電気が出れば安いものだ。四セントとか、三セント半とか日本でいう一〇円とか一二円という電気になるわけである。ただ使うところは問題だが、そういうポテンシャルがあるということならば、大きな送電線でどこに持ってこようと、送電線がいくら高いといっても、高圧で持って行って一遍に一回線で二〇万も、三〇万も持ってくる気ならば、そう驚くことはない。まして相当部分をここで使うということになればもちろん計画が成り立つということになる。いかにこれを使うか、どういうものを使うかということは、ただいま調査中の別の問題である。

## 2 上流部計画

パーモンから上流では、ルアンブラパンの町を水浸させないように、そのすぐ上流にダムを作

ればよいし、またそれより上流ビルマ国境までの間には、アーチダムであろうと、ロックフィルダムであろうと作れる所が沢山あるので、好きな高さにどこへでも作れるといった工合である。またさらに上流の中共との国境までの間にもダムが出来ると、これら三つの貯水池によって洪水調節が出来ると、普通の年ならば完全調節も出来ると思われる。また支流も勾配が緩いので大きな貯水池が出来ることが見て来た。

### 3 支流計画

支流については、ビエンチャン平野に流れているナンガムという支流だが、メコン河のバックウォーターが押している。またこの河の流域は雨量が多いので平野は非常に水没する。もしここに多目的ダムが出来るとすれば、この平野は助かるので、前から調べていたが、今度この問題を概略調査し、設計を作ることを日本で引受けることになった。それから非常に面白いのはナムデンという支流である。この河の上流、標高五〇〇メートル位のところに大きな貯水池が出来る。約七〇メートルのダムを造れば貯水池は六五〇平方キロ位になる。ここはまた雨量が非常に多いので、流量をはかって見ると非常に多い。一月の末だというにかかわらず一〇〇平方キロ当り一・五秒トン位の水

がある。その他の河は〇・二秒トンやほとんど無かったりであった。この河の料理方法はいろいろ考えられるが、流域変更で南側のセパンファイの支流に分水すると三五〇メートル位の落差がとれ、ここだけで一〇〇〜一二〇万キロワット位の電気がおきる。ともかくダムは大したダムでなく、水路も短いが六〇億キロワット時位の電気がおきるので、これは一番面白いと思う。なおまたこの河は別の河に流域変更するとか、流域変更しないで開発するとか、いろいろな代案が考えられる。日本の調査団員はすぐれた専門家がそろっているのでいろいろ案を出しているが、こういうアイデアもあると盛り沢山に並べてみようかと思っている。この河だけで合計二〇〇万キロワット位の電気が出るだろう。細かい計算はもちろん出来ないが、平均して三セント、一〇円というのは建設費の値段だから、一円足らずの電気になるだろう。国産的の安い金利と償却とを考えれば、皆売れるとすると七〇〜八〇銭の電気になると思う。これは海岸地域にはパーモンなどより近くなる。需要としては一般供給はどうてい考えられないから、一万キロワットや二万キロワットはしれたことだし、一〇万キロワット級の電力の供給は絵に書くだけであって、別にこの問題を研究しなければならぬと思う。この付近には石膏があるし、石炭地帯で石炭もあるし、若干の工業が考えられるが、相当のものは港に送ることになる。要するに四〇万ボルト級の送電線を考えなければなら

らないことになると思う。それからセバンヒンという河はメコン本流の洪水が逆流して来る。ここは雨が多いので一〜二万秒トンという洪水を出すので、この押し水のため非常に広い範囲に氾濫する。土地は非常によいので、これをつぶすか利用するかという段階になっているが、この下流までおよび洪水調節として上流に六〇〜七〇メートル程度のダムをつくれれば、これもまた貯水池が大きすぎて、渇水期に余計出して豊水期に少く出してやるというよな逆の効果まであがるようである。つまり他の支流の身代りをすることもできると思う。

次にタイのムーン河とチー河の合流点付近は、洪水鼠は少いが、勾配がゆるいので氾濫する。ウボン下流のピモンイとう所に大きな岩盤が河底に出ており、ここから下に一三のラビッドがある。これはもっと洪水専門家が詳しく検討しなければならぬが、アイディアとしては、このラビッドをブノ飛ばして洪水の疎通をよくすることある。ただ水を落してしまうと旱害期はこのラビッドの上の水が溜っているので、船も通れば水源にもなるというわけで、ラビッドを破壊すると同時に堰を造ってやらなければならないと思われる。

それから一番大規模なものは、セコン、セサン、スレボックというスタントレンで合流している三つの大きな支流である。これは非常に便利がわるく、また森林地帯で、なかなかよりつけないと



ころである。幸に行ける所まで行って水量の調査もし、またありとあらゆる地図も使つて想像もした。最上流部はベトナムから入つて調べたので、このアイディアをざつとたてている。セコンはラオスとカンボジアの国境近くにダムを造ると非常に大きな貯水池が出来るので、おそらくこの流域の流量調節は十分出来ると思われる。またその下流にも貯水池が出来そうである。セサンはベトナムの上流部に貯水池の出来る所が沢山あり、特にヤリという滝があつて、この付近は滝の連続だから、ダム水路式で開発したらよいと思われる。またその下流には非常に大きな貯水池が出来そうで、洪水調節灌漑用水などはもちろん十分得られそうである。

スレポックの上流はダルフックといつてベトナムの平たい潮水地帯だが、ここにも年完全調節出来そうな貯水池の可能性があり、これらは東海岸に近いのでいろいろな利点が考えられる。この下流も階段状に開発出来るようである。これら三つの支流だけで合計三〇〇万キロワットの電力が得られ、洪水は絶滅しうるかと思われる。

カンボジアの南の象山脈付近は雨量が非常に多い。バタンバンに流れている河などは洪水調節灌漑発電の点で、カンボジアでは面白いのではないかと思われる。これらは大きい小さいは別として、なるべく中規模ないし小規模で四カ国が承認しそうな代表的なものをあげたいと思つている。

カンボジア北部にスタンセンという支流があり、この川は流域一萬平方キロに対してわずかに三五メートル位のダムで約一、〇〇〇平方キロの貯水池が出来てうだが、雨量が非常に少い。これについても関心を持って調べている。メコン河本流のコーンの滝の下少し下ったところへ、四五メートル位のダムを造って、標高七五メートルまで堰き上げれば、貯水池は右岸の方へ延びて、わずかばかり水路を掘ればスタンセンの方へ水がはいってしまうのである。だから両方の貯水池は、合計五、〇〇〇平方キロ近くの大貯水池となりそうで、こうなればメコン河の下流の様子は一変するだろうと思われる。

#### 4 メコンの包蔵水力

以上述べたように支流で今調べているのは、四五〇〜五〇〇万キロワット程度だが、これらのまだ小さい上流地域の支流を調べると七〇〇万キロワット位、支流で出るだろうと思われる。有利に起こすのは七〇〇万キロワット位あるだろう。それから支流で水を溜めたために本流の増水するのが三、〇〇万キロワット位あるだろう。合計支流計画というのは一、〇〇〇万キロワット、本流で一、〇〇〇万キロワット結局、二、〇〇〇万キロワット位のものは大ざっぱにつかんで開発しうるだろう。月

本のレザーブに似たような数字がメコン河の下流地域だけであるということになる。灌溉、フラッシュ・コントロールその他の利益をあげればまだまだ問題があるし、なおまた小刀細工をやればセコンの上流を東海岸に分流するような案も考えられるし、分流すると多少高くても送電線が短くて港に近いという利点が出て来る。考えねばならない問題であるが、またやたら分流ということとは好まれないであろう。われわれとしてはあまりそういう熱意をもって最初から出発しない方がよからうと考えている。さっきのべたように、こういう一、二の例をもってしても発電で一〇円がらみのもあるし、一五円がらみのもある。アジアの電気を原料とする大きなインダストリーがこの周辺の海岸にも起り得るという前提で、送電線を入れても一円ながしの電気になるだろうと思っている。

なおこの計画の目標としては、ホイラー・ミッションが五年間かかって調査の結果を出すことになっている。早く行けば二年後に或は三年後若干のまとまった計画と目標が出来て、それから一年位方々持ち回って審査して、まあ四、五年後にはかたがつくのじゃないかとみられる。まあ一、〇〇〇万ドルから三、〇〇〇万ドル級位の二カ所か、三カ所についてなら行われると思う。パーモンがいくらよくても、結局は四、五億ドルかかるから、初めから一億ドル以上かけねばスタートで

きない。そういうものに初めから押し切るほどアピールするかどうかは分らない。いずれにしても日本が調べた支流から始まるものと思われ、調べたことが非常に強味になっている。

久保田 豊

(日本工管株式会社社長)

第三部

安芸岐一

## メコン河の国際開発

## 一 十年來の懸案

国連アジア極東經濟委員會（エカフエ）が、メコン河下流の開発のための調査を考えたのは、かなり前のことになる。一九五一年にラホールで開かれた第七回エカフエ総会でこの計画は承認されたのであった。この計画はその当初、主として洪水防御の観点から進められ、一応その踏査を行ったのであるが、その後この地域が政情不安であったため一時中止せざるを得なかった。一九五五年の第一二回総会でふたたびこの問題が取り上げられ、一九五六年の春から国連アジア極東經濟委員會の名の下に調査を開始することになったのである。この間に、河域開発の問題はいろいろと検討

された結果、ただ洪水防御を対象とするだけでなく、さらに積極的に水源利用の面の拡大をも同時に企図するというようになり、メコン河下流の開発を水源開発という立場で調査を進めるといふことに発展したのであった。

しかし一九五六年にはメコン河下流開発調査のための国連の技術援助資金の割当が十分に得られなかったので、アメリカ政府と協議の上、アメリカの国際協力局の援助により、まず調査を始めることとし、その年の春に、アメリカ連邦政府の内務省開拓局の専門家たちによる調査が行われた。エカフェの当局では、止むを得ず自分の計画はこれを可能な範囲に縮小し、一九五六年の暮になってこれと平行して現地調査を行った。日本からは久保田豊氏がこの調査に参加した。この二つの調査報告をもととして、エカフェ当局は具体的な開発計画を立てることとし、国連からの援助によってホイラー調査団が組織され、久保田豊氏はさらにこの調査団にも参加した。いわゆるホイラー報告書が作成されたのは、一九五八年一月のことであった。報告書には大体次のようなことが述べられていた。

ホイラー調査団は一九五七年の一月から二月にわたって現地調査を行い、関係四カ国の政府当局と検討の上で報告書を作成している。この報告書で述べているのは、要するに現在入手されるメ

コン河流域の水文とか、気候・地質などについての資料はきわめて不十分であって、これでは詳細な内容をもつ将来計画を立てることは不可能であるから、ただちにこれらの資料収集に着手する必要がある。しかもこの場合、流域一帯にわたって一貫性をもたせるために、この資料収集に当って四カ国は統一した基準を採用すべきであり、さらにこのためには本流から支流にわたって適当な地点に雨量や水量の観測所を設けるべきであるということを勧告している。また本流から主要な支流にわたって航空写真測量を行い、これによって地図を作成すべきであるといい、さらに流域の総合開発計画を策定するためには洪水調節、かんがいおよび排水、農業、林業、漁業、鉱業、内陸水運、運輸、さらに電力供給市場とか、一般経済に関連する事項についての調査研究も行われることが必要である、ということを勧告している。四カ国委員会から早期開発を要望されている数カ所の地点に限らず、開発有望な地点については、その全部にわたって調査を進めるべきであり、この場合にはむしろ本流筋は支流筋に優先すべきであるというのである。

ホイラー調査団は、この調査作業には五カ年を要するとみており、総経費を九二〇万ドルと見積っている。さらにこの報告では調査作業の実施と開発予備計画の立案に当っては、すべての分野にわたる専門家を揃えた有資格のコンサルタント・エンジニア会社、あるいは水資源関係の分野で、専門



知識を有する外国の国家機関に担当せしむべきであると述べており、さらにトップ・レベルの国際的技術顧問団を設けて、四カ国委員会を援助せしむべきであると示唆しているのである。

この報告書は一九五八年二月に四カ国委員会で承認されており、翌三月の第一四回エカフェ総会で採択されている。

この報告書で述べられている開発の骨子は、中流部にあるラオスの旧都ルアンブラバンから河口までのおよそ二、〇〇〇キロの区間を対象としているものであり、発電、かんがい、舟運と洪水調節を主な内容としている。流域の七カ所にダムをつくることが予定されており、ここで出力五二八万千瓦ワットの発電がみこまれているのであって、しかも発電原価は一キロワット時当り〇・二三セントといわれている。新しくダムによる貯水によってかんがいされる耕地面積は、九〇〇万ヘクタールと予想されている。また今日航行の障害になっているケセラートやコーンなどの岩礁は、ダムをつくることによって水没するので、河口から二、〇〇〇キロのルアンブラバンまで大型船舶の航行が可能となるであろう。さらにこれらによって流域の森林、鋌山等が開発され、国内鋌業の発展を促進することとなるであろうし、またこれによって雨季の洪水を調節し、乾季の下流デルタ地帯の塩害をも軽減することもできるというのである。

ホイラー報告書がエカフェの第一四回総会で採択されたということで、メコン河下流開発のための本格的な調査は、新しくその第一歩を踏み出したのであった。日本政府の申入れによるメコン河支流調査の仕事は、これにつづいたのであって一九五一年以来の希望はこのようにしてようやく実を結びはじめたのであった。

## 二 国際開発めざして

一九五四年の四月にエカフェの第二回水資源開発地域技術会議が東京で開催された。この会議の第一回は一九五一年一月にニュー・デリーで開催されたが、これは洪水防衛技術会議という名で行われ、五四年から洪水防衛の上に水資源開発を考えるということになったのである。私はこの技術会議が東京で開催されたときに、エカフェ事務局の洪水防衛水資源開発局長の沈怡博士から、メコン河開発計画樹立についての話を聞いたことがあった。それはここで国際河川開発の一つの例をつくりたいというのであった。

一 国内にあってさえも河川の開発ということは容易でない。経済の拡大にしたがって、河川に対するいろいろな要求は次第に大きくなってくる。そうするとこれを調整することの必要が生じてき

て、このために総合開発という考えが導入せられるようになってくるのであるが、この場合には開発に当ってより一層困難な問題が生じてくる。もともと一つの水を対象として多くの人々がこれに関係するのであり、またいろいろな多様な利用方策を考えようというのであるから、それぞれの水を対象とする人達、あるいはその利用目的の間に利害が一致しないために、開発が阻害されている例は多い。

かんがい一つ取り上げて見ても、私達の間では昔から「水争い」ということが絶えなかった。洪水の際に対岸の提防が決壊すれば、こちら側の人々がこれで助かったと喜ぶのである。もしさらに多種多様な目的を、ということになるとその解決は一層困難になるのであった。

それが国際河川となると問題が国際的になるということ、その開発は一層困難さを増してくるのであった。ドナウ河の古い例は別としてもカナダとアメリカのセントローレンス河、インドとパキスタンのインダス河、さらにエジプトからスーダン、エチオピアにおよぶナイル河の開発問題などは、よく私達の間で知られているところである。したがって、なんとかしてこのような国際河川の流域における諸問題を解決して開発を行い、これを住民の利益に供しよう、そしてとくに開発のおくれている国々ではこれを経済開発の原動力に使っていこうという考え方が強く出てくる。こ

ではじめて国際連合の名によって、この調整の困難な問題を解きながら、未開発の資源を有効に利用して行こうという考え方が生れてきたのである。

もし国連の名でこのような複雑な問題を解決し得られる道を見出すことができるとすると、これはこのような地域における将来の開発の在り方に一つの例を開いていくことになるであろう。私はその成果に大きな期待をかけるのであって、エカフェのこれの担当の人達は、新しい一つの例をつくらぬという意味で強くこれを支持しているのであった。

エカフェでは四カ国委員会を中心にして、ホイラー調査団の勧告にしたがい、開発計画樹立についての具体的な資料集めに着手するとともに、国際連合の技術援助機構とか、この付属機構の協力をえて、河域開発の背景となる地下資源とか農林水産業のあり方、ならびに気象条件などの基本的な調査をも進めている。

メコン河は地域の点からいうと、世界の大河なのであって、その第一〇位を占めるといわれている。私達が踏査した下流地域に限っても、これを空から視察するのに五日間を要するのであり、正味三七時間は飛んでいるのである。地上踏査の行程は八、〇〇〇キロにおよんでいた。しかもこの大河は今日までかつて近代的な意味での開発は、ほとんど行われていないのであった。この流域の

開発は、たしかにこの流域の住民の生活向上に大きな役割をもつに違いない。しかしこの大河には、今までかつて人間が手を加えたことがほとんどないのである。なかったということは、言い換えれば要求がなかったということ、要するに、ここには古くからのしきたりがそのまま続けられているのであり、新しく手を加えたところがあるといえ、コラート高原で、いくつのかんがい計画が進められているという程度であった。

ここに大きな計画が提案されたのである。この効果には大きな期待がかけられている。しかしこの効果はどのようにして吸収されていくのであろうか。ここでは依然として古い生活がつづけられている。しかもラオスの人口は二五〇万程度であり、カンボジアは四五〇万位、南ベトナムで一、〇〇〇万足らず、タイが一、七〇〇万程度であるといわれている。電力の消費はどのようであるかという点、もっとも多量に消費しているタイでさえ、今日およそ二億三、〇〇〇万キロワット時にすぎないのであって、ラオスでは一〇〇万キロワット時程度であるといわれる。そしてここにはこの自然環境を背景として、長い期間にわたって停滞している農業が営まれているのである。

今日このメコン河のデルタ地帯では、洪水氾濫の水深に適應するような各種の水稲の品種が普及し、住民は洪水と共に生きるということを学んできたのであるといわれている。

## 三 徹視的な調査研究

私は一九五七年一二月にマニラで開催されたエカフエ主催の水資源開発地域技術会議に出席したのであったが、この会議での報告に、私は大きな関心を持たざるを得ないのである。エカフエ域内の諸国では今日それぞれ各国とも長期、あるいは短期の水資源開発計画が順調に進んでおり、このために相当の資金が投下されているが、大体満足すべき状態にあるということが述べられた。しかし会議での討議の結果によると、われわれは相当に開発事業を進めているのではあるが、進めるに当って今日いろいろ困難な問題に当面している、これをなんとか解決しなければならぬというのであった。この困難な問題というのは、国内資金とともに外資が不足しているとか、技術者と熟練技能者が不足している、建設資材が不足している、水文資料が不適合であるということなどであった。そしてこれらの困難を克服するには、低開発諸国はその他の友好国から援助、あるいは借款の形式で経済的援助を受けられるよう努力しなければならないとか、先進国からの技術援助、さらに訓練所の創設についても援助を受けられるよう努力が必要であり、また可能な限り、国内原料を建設に利用する方法の検討を進めるべきであるとか、また水文資料を充実するために財政上いろ

いろ支障があるであろうが、その整備を図るべきであって、とくに水文資料観測網の設定とか、適当な基本資料の欠けている場合に水文資料をどう取り扱うか、という二つの課題に対して早急にシンポジウムを開くべきであるという勧告を行なっていたのである。

私はまた一九五八年二月にニューヨークの国際連合本部で開催された工業化作業計画諮問委員会に参加するよう招請を受け、これに出席した。この会合は国連経済社会理事会担当の事務次長ド・セイソンの司会の下に各国から集った一〇名の委員の間で、とくに後進国の工業化問題をどういう方向に解決していったらよいかを、主として経済的な面から討議したのである。国連事務局長もこれらの問題については、すでに数年にわたって検討を進めて来たのであるが、今日になって後進国の工業化がそれぞれの国の経済開発にもつ役割が、とくに強く認められるようになってきたことから、新しい段階に到達したとして、国連総会および経済社会理事会の決議にしたがって、このための新しい方向を検討するために、この専門家委員会を招集したのであった。今日まで国連事務局が工業化を進めるためにとってきた方法は、調査研究と援助金支出の二つの方法であって、調査研究に關しては主として国連地域経済委員会と共同して、生産設備のあり方、とくに資本集約的な手段とか、あるいは労働集約的な工程との比較の問題、あるいは生産設備の単位の問題等に関する調査研

究であって、土を運搬するのに機械か労働力かに依存する場合、運搬価格はどうかというようなことや、あるいは鉄鉱業、紙バルブ工業をどのような生産単位で生産を行なったら、生産原価はどのようになるであろう、というような徹視的な接近方法をとってきているのであった。そして資金上の援助に関しては、現地に技術者、あるいは技能者の訓練所を設けるとか、あるいは技術者を先進国に派遣して訓練を受けさせるなどということを行なっていたのである。

#### 四 投資効果も考えて

国連事務局長は何故に徹視的な調査研究をとくに取り上げて進めてきたのであろうか。私はこれはエカフエの第三回水資源開発地域技術会議の報告書が示すところのものと同じ意味をもっているのではないかと考えるのである。エカフエ地域内の諸国は、経済発展の基盤をつくるものとしてかんばんが事業とか、発電、あるいは洪水防御事業などの建設事業を進めてきたのであった。そして今日、資本の不足とか、技術者の不足、建設材料や建設の基本になる資材の不適性など、種々の問題に当面しているが、私はこの事実が建設事業そのものから発生しているのではないかと考えるのである。たとえば食糧生産の安定から、増産を基として近代的なかんがい系統をつくっても、従来の



農業経営の形態はなかなかこれを受け入れない。この地域の水稲耕作は多くの場合、労働力ということが大きな制約条件となっており、この結果は作付の時期を大幅に変動させるなどということから、それぞれの水田の成育状態に時間的な相違ができて、統一されたかんがい系統の利用を不可能にしている。大きな河川のデルタ地帯の水稲耕作はむしろ洪水とともに生きているのであり、浮稲の中心地をなしているといわれている。

とくに熱帯低気圧におそわれる地域ではよほど十分な資料がない限り、最大洪水量の予測は困難である。洪水量の推定が不確定であればあるほど、河川に構造物をつくる場合には、より安全を期するから、より大きな洪水量を想定しなければならない。ダムをつくるにしても良質なセメントより、十分に得られる資材を主に考えるということから、石塊ダムや土ダムが考えられるのであるが、この場合にはより大きな洪水量ということは、より大きな溢流堰を必要とすることから、建設を著しく大きくする。しかもその貯水池の利用効率は低からざるを得ない。そしてこれらの結果は発電原価とか、かんがい用水の原価を高くして行くのであった。しかもこの原価高の資源を十分に使いこなせないというのである。

これは一つの例であるが、このような事情が結局経済の循環を阻害するものであり、その結果と

して資金の流動を阻み、資金の不足を痛感させているのではなからうか。私は今日の事態を改善させるためには、投資効果の波及する事業をよく検討し、その順序にあやまりのないように進めなければならぬのではないかと思つてゐる。国連事務局が経済開発に當つて、これに徹視的な接近方法をとつてゐることはこの趣旨に通じるものと考えられるものであつて、環境に相応する適切な手段を取ることの必要性を示唆してゐるといへよう。

しかし投資を十分効果あらしめるためには、需給関係を正しく把握するということはたしかに必要であり、私たちはそれぞれの需要想定にしたがつて計画的に処理してゆかなければならない。巨視的な接近方法と徹視的な手段とを平行させて、常に實際の経験がはじめの想定に反映し、これが現実の姿に反映することのできるような組織を、この場合もたなければならぬことを痛切に感じるのであつた。

しかもここに急速な工業化の進展が要求されてゐるのである。このためにはもっとも新しい生産手段が導入されなければならない。しかし同時にこの生産性の高い手段を効果的に運営するためには、十分この効果を吸収し得られる環境を検討し、これをつくり上げてゆくことが不可欠な要素となつてくる。この考え方は共同市場の育成ということにつながつており、それぞれの国の産業の特

殊化を意味するのであって、ここに新しく民族主義的な行き方の調整が要求されるようになってくる。もしこの新しい環境の創造に失敗するとすれば、急速な経済発展は不可能になるといえるであろう。

## 五 後進国開発の一環に

私はメコン河下流の開発計画のできるだけ早い実現を期待している。その具体的な成果を期待しているだけに、この計画が実を結ぶために必要なすべての手段を考えなければならぬと思つてゐる。

エカフェでメコン河の開発計画を取り上げた最初の趣旨は、国際河川の開発に新例を開きたいということであつた。今日までの調査では、この考え方がやはりその中心にあつたといえるであらう。ホイラー調査団の報告書では、支流筋よりも本流筋の計画が優先すべきであるということをお告していた。支流の開発に関しても、この開発が本流の水利に影響を与える範囲内のものについては関心を持つよう提案しているのである。

しかし日本が支流の調査を受けもつようになってから、関係四カ国の政府からは踏査を追加する

ようにとの申入れを受け、その支流は三四河川におよぶようになった。その多くの計画は地方的なものであって、一国内の開発計画ともいえるものが多いのであった。私たちはこれを受託してそれらの踏査を進めている。私は後進国の経済開発はいかに在るべきかという考え方が、次第に新しい段階にはいつているものと考えるのである。一九五九年一月に国際連合特別基金が設立せられ、その活動を開始した。その特別基金の対象となるものは、資源調査とか、主としてその資源の利用を検討する工業試験所、あるいはこの成果を実現させるための試験工場であるといわれている。永らく期待していたことがようやくその緒についたものといえるであろう。後進国の工業化はこれによって幾分でも促進されるに違いない。メコン河の調査もこの特別基金の対象になり得るものと思期待している。私達は新しい立場に立つてメコン河流域の開発を考えるべき段階に達したものと思われる。

私は国連事務局に設けられた工業化作業計画問題委員会の活動を想起するのであった。メコン河をめぐる諸国の急速な経済開発が期待されている。メコン河の開発はこれからの諸国の経済発展の基幹となるであろう。それなればこそ私達はこの基盤になる開発の効果が円滑に現われてくる一連の開発計画を樹て、私達の最初の投資効果が停滞しないよう努力しなければならないのである。ホ

イラー調査団の報告は七地点の調査に五カ年を要することを述べている。この七地点の詳細な調査の他に、総合的開発の見地から、資源調査、水文資料観測、農林水産業に関する諸調査、また電力市場に関する諸調査が国連技術援助機構、世界気象機構、食糧農業機構を通じて行われたのであった。

現在、後進諸国の速やかな経済開発がのぞまれている。しかし現実に開発の進められている事情はエカフェの会合で述べられている通りなのである。たしかに今日の後進諸国の経済不況は、その単一経済という性格によるところが大きいといえるであろう。原料安の製品高という今日の事情は大きく単一経済の諸国に影響を与えている。しかし過去一〇年間に私たちは経済開発のため何らかの投資を行ってきた。エカフェの会合でも一応はこのことは認められている。そしてその効果についてはまた先にのべた通りなのであり、ここでは私達が何をしたかということが、主として原因となって今日の状態をひきおこしているのだといわれている。国連事務局で経済開発の計画に徹視的な接近方法をとることの必要なことを述べているのは、やはり今日の事態をこのようにみていることによるものである。

今日なおメコン河にそって停滞した生活が続けられているのである。人々は洪水とともに生きて

いるのである。このような環境のなかで、急速な経済開発を進めなければならないのであるから、私達はこのためには生産から消費にわたって一連の計画を考えなければならぬ。これは人口問題から社会的な、さらに経済的な問題、それに技術的な問題が一連のつながりをもって含まれている。互に計画調整の困難な国際河川を国際連合の名においてこれをできるだけ早期に解決することのできる新しい例を開いて、関係諸国民の生活水準の向上に役立たせることはきわめて好ましいことである。四カ国が協同して解決をはかるということは、いろいろと困難な問題があるではあるうが、是非その具体化を企図したいものである。しかしこれと同時に小規模ではあるが、早期開発によって効果の待される諸計画も考えられるのであるから、この点からの検討をも促進して、効果の早期実現をはかるべきではなからうか。

もし私たちの努力が、この地域開発に、何らかの寄与をすることができるならば、私たちの喜びはこれにすぎるものはないのである。

安 芸 岐 一

(科学技術庁審議官)

第  
四  
部

白  
木  
竜  
雄





## メコンの旅

一九五九年一月二三日 わたしは調査団一行を香港で待った。こんどの調査団の行程でいちばん注目されたのは、チャーター機でメコン川の上空を約一万キロ飛ぶことだが、この飛行機の乗員には限りがある。もし各社から申込まれたら朝日新聞も断念しなければならない。そこで各社に気付かれないよう一日早くこっそり羽田を出発、香港で待っていたのである。

朝日の江藤香港支局長に案内してもらって半日間、香港をゆっくり見物して、飛行場にかけてみると、ちょうどフランスに帰る岸恵子さんが同乗していて、一行はこの時とばかり岸さんをおこなで記念写真をとっていた。

サイゴンに着いたのは八時過ぎだった。夜はとっぷりくれている。非常にむし暑い。

羽田で女房にオーバーを渡し、香港では夏服のため多少の寒さを感じていたのだったが、ズボン下をはきかえるのを忘れたため、腰の下に火がついたように暑い。外地旅行失敗第一号だった。

宿はサイゴン川に面したマゼスティックホテル。サイゴン第一のホテルである。フランス語しか通じないのではないかと心配していたが、ゴディンジェム大統領の親米政策以来、アメリカが幅をきかせ、英語が通じるようになっていてホッとする。

T銀行の人が中国人の街シロンを案内してくれるという。助平根性をまる出しにして、早速同行することにする。シロン一流のキャバレーに飛び込んだ。二、三回ダンスをしているうちに、ボーイが何度もわれわれの席にやってくる。「先生、姑娘いらぬか」としつこくすすめるのにはビックリした。「売春禁止法では、日本より先輩で、すでに一九五五年の独立当初から実施されていると聞いてきたのに」というと、T銀行のS氏はニタリと笑った。

いまサイゴンで街の話題となっているのは、一月一日から実施された新家族法だそうだ。従来は一夫多妻が認められていたのだが、この法律のおかげで、おメカケさんを持つことが禁止された。しかしそれがどれほどきびしく励行されているのか。いままで持っていた人はどうなるのかということになると情報通の在留日本人にもわからない。ホテルに帰ったのは午前零時近かった。

一月二四日 赤いブーゲンビルの花が咲き乱れるサイゴンの街は一年中でいまがいらばんしのきよい季節である。つまりもっとも活動しやすい時でもあるのだから、ともかく街には活気があふれている。

まず汽船の気笛に目をさまされた。窓を明けてみるとホテルから約五〇〇メートル下流の波止場に、仲良くアメリカとフランス系の船が二隻ずつ泊っていた。いずれも一万トン級の船だが、まだ十分夜も明け切っていないのにすでににぎやかに荷役をはじめていた。

サイゴンはいま膨張の一路をたどっている。数年前までこの人口は約一五〇万人といわれていた。が、昨年、政府が国勢調査をした結果では一七八万人という数字が出た。ところがフランスの経営している電気水道会社の昨年末の調べでは二〇〇万人を越しているという。不思議なことにサイゴンの人はみなこの会社の方が正確だと信じている。

こんなに人口がふえたのは難民が北ベトナムから五〇万人近くも流れ込んできたのがその主な原因だが、その割には街は静かで、しかもきれいだ。香港でさんざんやまされてきた乞食の姿もここではほとんど見かけない。サイゴンに一〇年近く住むSさんは「とにかく服装が良くなりましたよ。四、五年前まではほとんどハダシだったのが、うちの女中でもサンダルをはくようになり

ましたからね」という。そういえば街を歩く安南服の若い女性の上衣もいろとりどり。男子もほとんど清潔なズボンに開襟といった具合。ハダシはほとんどみつかからない。

対中国人政策もかなり進んでいるようである。昨夜シロンのキャバレーのダンサーに聞いたことだが「わたしは上海生れ。しかしベトナム籍を持っている。わたしだけじゃない。シロンにいる中国人は大半ベトナム籍になっている。いや、ならなければおれないのです」といっていた。

約六〇万人から七〇万人といわれるシロンに住む中国人は、中国籍のまましていると貿易商、米穀商といった主要な仕事にはつけない。「ええい、いっそのこと」と、ほとんどベトナム籍に衣がえしてしまったというわけである。

「ゴディンジェム政権は安定している」と、すべてのお役人が自慢する。街にも役所にも相変わらず、ゴ首相の肖像がベタベタとスターリンもどきにはられている。もっとも政府に対する批判が必ずしも無いわけではない。北部、中部、南部と、出身地による対立も全く解消したというところまでもすすんでいない。しかし五月に行われる大統領の選挙にはゴ大統領の再選はまず間違いないようだ。

かってサイゴンは「小バリ」と呼ばれていたことがある。事実、サイゴンの大通の名はすべてフランス名だった。そして小型ノートルダム寺院までそろっていた。その寺院はいまでも南の空に十

字架をそびえたせている。だがその前の、パリのシャンゼリゼに相当するカチナ通はレロイとなり、市役所前のシャルネ通はゼアロンと、いずれも昔の安南王朝の王様の名で呼ばれている。

しかしフランス勢力はいまでも根強く残っている。市の生命である電気・水道会社はフランス人の経営だし、タクシー会社、船会社、ゴム会社、製糖会社と、主な事業の実権はまだほとんどフランス人の手ににぎられているとみてよいようである。

もともとアメリカの進出も目ざましい。年間二億ドルといわれる一般経済援助をはじめ、政府の高級官吏さえハッキリ知らない、これに数倍する軍事援助。ベトナムの新しいスポンサーとしてアメリカがグノと幅をきかせてきつつあることは当然のことだろう。一月からはじまった一九五九年のこの国の予算が約一五〇億ピアストル、この三分の二がアメリカの援助に支えられているという。だからわたしたちの泊ったマゼステイック・ホテルもアメリカ人のお客さまでいっぱい。英語が急に幅をきかせるようになって、官吏も英語使いは出世が早いというウワサさえさやかれていた。

日本政府が派遣したメコン川開発調査団のこの日の仕事は、農林省、外務省といった各お役所を訪問し、調査の打合せをすることだった。調査団の中には「賠償がもたついているので、十分な

協力が得られないのではないか」と心配する人もいた。だがそれは全く取越し苦勞に過ぎなかった。

農林省では大臣みずから出てきて調査団と打合せをするし、公共企業省の発電部長は一行につきつきりて世話してくれるという力の入れようだった。日本の技術に対する期待はわれわれが日本で考えていた以上に大きいようである。

夜、あるベトナム人の貿易商に会った。彼はこういった。「わたしには二人の男の子がある。長男はフランスに、次男は日本に留学させようと思っている」と。ベトナムの經濟を支えているはずのアメリカの名は出てこなかったのが印象的だった。

一月一五日　メコン川開発調査団は一五日朝八時、特別にチャーターしたベトナム航空機でサイゴン飛行場をあとに、メコン川沿岸上空一万キロの空の旅に出発した。サイゴン飛行場は写真の撮影が禁止されている。

思い出の旅に出る一瞬をとれぬのは残念だった。

チャーター機の機種はDC3、三〇人乗りで席には多少の余裕はあるが、エアコンディションも

窓の二重トピラで調節するといった旧式だ。窓のガラスもくもったまま、これでは満足な写真もとれぬと失望したものの、乗出した船ならぬ飛行機、いまさらなんともならぬと飛び出した。

だが窓外に見える景色はすべて未知の世界。飛び立ったところが、もう自指す穀倉メコン・デルタ地帯だった。雲が低くたれこめていて十分見ることができぬのが少し心残りだが、雲の切間からのぞいたところではアゼ道も整然としている。「さすがベトナムが自慢する穀倉地帯だけあって」と感心していると、団員の神奈川農事試験場の狩野博士が、「よくごらんなさい。カンガイ用の排水路がひとつも無いでしょう」という。なるほど注意してみると、メコンのハンランの間を縫って肥料もやらず、草もとらずの自然農法らしく、刈取ったあとは手入れもせず放つてある。

河幅が四キロはあるだろう。メコンの本流をひとまたぎすると、もうカンボジアだ。サイゴンを出発してからわずか五〇分でブノンベンの飛行場に到着した。

午前九時二〇分ブノンベン飛行場を出発した。こんどはカンボジア平原だ。この国の中心にある琵琶湖の二倍半の広さもあるトンレサップ湖の回りを南西から一周することになった。

最初のうちはデルタ地帯同様、よく耕やされた風景が続いた。しかしそれもアツという間だった。あとはチークやラワンラワンの森林がはてしなく続いている。ひどいところになると一キロ平方くら

いのところに、木といえども、三本生えているだけ、あとは一面の草群だ。なかにはその草さえ生えていないところもある。こんなのを荒涼とした風景というのだろうか。

このあたりで空から部落をさがすのは簡単だということにすぐ気が付いた。まずヘビのようにまがりくねった細長い緑の森林地帯が目の中にとびこんでくる。と、その真中にトンレサップ湖に流入するメコンの支流がある。その川のふちのどこかに必ず部落があるからである。しかもその周辺だけがチョコチョコと田んぼになっている。山のテッペンまで耕している日本からみれば誠にもったいない話だ。

山側に少し近づく、こんどは水不足になやまされていることがわかった。無数にある用水池が乾季だとはいえ、いずれもからっぽだ。

正午近くシニームリーブに降りた。ここから約五キロのところに世界的に有名なアンコールワットの遺跡がある。

いうまでもなく、いまからおよそ八〇〇年ほど前に、カンボジアが東南アジアで全盛を誇った時代の壮大な石造りのお寺である。四キロ平方ぐらい。とにかくお城のような壮麗さだ。だがここにも時代の波は遠慮なく押しよせていた。かつての統治者だったフランス人に代って最近の観光客は



大半がアメリカ人だという。この日もアメリカ人夫婦が、にぎやかに見物して回っていた。われわれの乗ったバスの案内人の言葉も面白い。言語としてはたしかに英語なんだが、昔のフランス語がわずれきれぬとあってか、発音は全くのフランス語調だった。

午後は東北部を飛んだ。ここは南西部と全く対象的で、底知れぬジャングルがどこまでもどこまでも続いている。いちど落ちたら、発見されるまで、かなりかかるだろうなどつまらぬことを考えさせるほどだった。

ここで調査団はカンガイ、発電両方に有望な開発地点を発見した。ブノンベンの真北、約二〇〇キロのところ、高さ三〇メートルのダムを築いてセン川と呼ぶ川をせき止める。すると、トンレサップ湖と同じような大きさの湖ができて、電気が八万キロワットほど発電できるほか、トンレサップの沿岸で、約五〇万町歩ほどの土地が干拓できるだろうというのが久保田団長がえがいた夢だった。

トンレサップというのは不思議な湖だ。雨季になるとメコン川の水が逆流して、現在の五倍にふくれ上るといふ。そのためか、岸辺というものがない。乾季のためかもしれないが湖の中に田んぼがあったり、木が生えていたり。なんのことはない。空からみれば、台風あとの浸水地そっくり

だ。このあたりに野生の象がいるところがあるというので、ねむい目をこすりながら、いっしょうけんめい注意していたのだがついに発見することができなかった。ブノンベンに帰って、ここで一泊、泊ったホテルがフランス人の経営で一切言葉が通じないには閉口した。

一月一六日、ブノンベン飛行場を出発したのは正午に近かった。この日はスタントレンまで本流に沿って進み、スレボク、セサンの両支流を調べることになっていた。

コンボンチャムからクラチェを過ぎるころ、本流の中の岩が多くなってくる。これがメコンの舟運をさまたげている第一の関門だ。兩岸は幅一、二キロほど耕やされているだけ。あとは未開地か密林だ。

支流に入ってもずっと平原がつづいている。しかも密林の連続だ。人家はもうほとんど無い。少し傾斜があると気付いた時にはもうベトナムに入っていた。

再び広い台地だ。ベトナム政府が開拓にカゴプを入れているダルラック高原である。このあたりで国境を出たり、入ったり、また出たり。ここでまだ有望な開発地点を発見した。

そのベトナム側の草原地帯で狩野博士ら二、三人、が二、三〇頭の野象の群をみつけた。しかし

これは残念ながら、あとで聞いた話。どうやら、かつて安南王朝の王様が狩場として野獣を放し飼いにしていた名残りらしい。

安南山脈でもいちばん高い山のひとつであるゴクリン山（海拔二五九八メートル）の横をエアボケットになやまされながら東海岸に出ると、その下がツーランだった。ツーランには雨が降っていた。田んぼはちょうど二期作の第一回目の植付けがすんだばかり。非常に寒い。スエーターを着込んでいるのにみんながブルブルふるえている。風呂好きの日本人にとってヒト風呂あびたいところだが、残念ながらその設備も無かった。

ツーランのロイヤル・ホテルは海岸に面していて、みかけは非常に立派だった。調度品もかつてのフランス人の豪華な生活をしのぼせる。しかしシャワーからはもちろん湯は出ない。金具類も全部クサッている。煙草の灰皿もない。要求したら「無い。床に捨てろ」ときた。窓ガラスも二枚ほど割れたままだ。副団長の安芸さんと「コウモリでも出そうだ」と笑いあった。

ツーランの飛行場に降りて、まず驚かされたのは、日本ではもうとくに忘れ去られているトーチカや望楼にお目にかかったことだった。しかし考えてみれば、これは驚く方がウカツだった。ここは北ベトナムの国境から約一六〇キロ、対共産圏の第一線の後方地帯であるわけだ。飛行場の横

には兵舎もあつて歩哨が警戒に當っていた。将来メコン沿岸の開発が進めば、物資の中継港のひとつになると見られている港には、二、三隻の軍艦の姿も見られた。

一月一七日 ツーランの飛行場を出発した時はまだうすくらかつた。午前五時を少し過ぎたばかりだった。

この日はまず安南山脈とボロベン高原の間を調査した。ボロベン高原はラオス政府が「日本の移民を受け入れたい」と、門戸を開いているところである。ここで調査団は大きな電源の豊庫を発見した。

セコン川のまた支流のナムコン川でのことだった。落差はおよそ一、〇〇〇メートルほどだが、これが時おり、一〇〇ないし二〇〇メートルのタキ状になって流れていることがわかつたからである。川幅はおよそ五〇メートルから一〇〇メートルぐらい。団員の中でいちばん若いひとりである日本工営の吉松照夫君(三〇)は「僕が一生かかっても開発しきれません」と感激していた。

ユエの飛行場に着陸したのはまだ正午前だった。国境から約六〇キロのユエはさらに警戒が厳重だった。というより完全な軍都となっていた。飛行場の横にはもちろん兵舎があつた。しかしさら

に強く印象ずけたのは一万人は収容できるだろう、広い難民収容所だった。そこにはまわりに鉄条網がはりめぐらされてある。入口には歩哨も立っていた。

「ユエというようなところに二度とくることもあるまいと、午後の飛行をさぼって街を見物するのことにした。街に入ると軍隊関係の建物が実に多い。必ずそこには自動小銃に着剣した番兵が立っていた。それだけではない、重要な橋にも兵隊が警戒に当たっている。観光地の旧王城にまで一個分隊ぐらいの番兵がいた。面白かったのは民兵（正規軍でない軍隊）の宿舎なのだろう。コン捧を持った歩哨兵の立っていたことだった。

とにかく市のお役人も市民の軼息をかきたてるのに必死のようだ。市の中央部を流れる香江にかかった鉄橋のそばには、共産軍の恐しさを絵入りで説明する、デッカイ告知板がいくつもいくつもならんでいた。

だが、市民の方は案外そうだったことは知らぬげだ。夕方ともなれば、若い女の子がきれいに着かざって河原を散歩している。呑み屋らしいところでは、青年たちが無駄話を楽しんでもいた。別に燈火管制があるわけでもない。

それにしてもツーラン、ユエともその人口のふえ方はすさまじい。四、五年前までツーランは五

万人ぐらい、ユエは一〇万人程度とされていた。それがいまでは前者が約一五万人、後者が三〇万人にもふくれあがっている。いずれも三倍だ。その大半が北ベトナムからの避難者だが、軍隊相手のひともうけをたくらんで集ってきた者も相当いるらしい。

おかげでいちばん困っているのは学校のようなものである。公立学校は小学校でもなかなか入れない。ほとんどが寺小屋式の私塾に通っているが、それさえ二部授業、三部授業はザラだという。

本屋をのぞいてみた安芸博士は「英語と科学の本が、戸棚の重要部分を占めていた」と語っていた。ベトナムの青年たちが必要と建設への意欲にもえて、この種の本を望んでいるのだろうか。

街の商店にはかなりの日本商品がならんでいた。繊維品のほとんどがメイド・イン・ジャバンというのが中国人商人の推定だった。もっとも、この国の人はフランス品を使いなれているためか、この国境の街でも化粧品から飲物まで大半がフランス品。しかしフランス人そのものは、かつて数百人いたこの街に、わずか五人しかいない。アメリカ人は、軍事顧問としてかなりいるはずだが、ゆきずりの旅人の目にはその影さえうつらなかった。

夜、ホテルで旧安南王朝の貴族にあう。「ユエの市内は平穏だが、国境近くではしばしばテロもある。しかし市民は案外平静だ。政府のお役人がいかに北に対する反抗心をかきたてようとしても市

民の士気は一向にあがらない。ベトナムは南北に分れていても、朝鮮のように互いに血を流しあつたことがないからだと言っていた。

一月一八日 ユエの飛行場を出発し、ラオスの空に入った時、非常に珍しい風景に出会った。場所はラオスとタイの国境の街、タケクかう約七〇キロの北方、ブーバベットと呼ぶ山の付近のことである。

いままで続いていた密林が無くなって、木は一本も無い。ネズミ色をした巨岩がニョキニョキとそびえている。その付近に行つた時のことだった。枝川の水路を追っていると、急に見えなくなつた。不思議に思っていると、こんどはとんでもない所から顔を出した。こんなことをくりかえすこと、二度、三度。結局調査団はこの付近の岩層は石灰岩で、川が岩と岩の間をもぐってまた地上に現われるのだということになった。

同じくラオス側、タイとの国境近くでのことだった。時々密林の中にポツカリ空地ができて、泉のあるところが見つかった。そこには必ずといってよいほど一〇頭、二〇頭と動物がいる。小さいのでハッキリしないが、野生の鹿というのが、みんなの一致した意見だった。

メコン川の本流を横切ってタイに入る時、ひとつのコントラストに気がついた。ラオス側が密林のままなのに、タイ側は実に良く耕やされていることだ。これは国柄を示すものだろうかと考えながら、ユラート高原の上を飛んでみると、これもただ比較の問題だということがわかった。ここでも大部分はやはり密林地帯、耕地の多いところでも、森林と田畑がカスリ模様を描いていた。正午近く、ラオスの首都ビエンチャンの飛行場に着いた。

午後の空の旅は楽しかった。飛行機はビエンチャンからメコンの本流に沿ってルアン普拉バン、さらにその奥地へと向った。いままでの平原の多い景色から、急にけわしい山が、川の兩岸にせまらる。つまりいままでの旅にみられなかったこの日本的な風景が、調査団の目を楽しませてくれたからである。

メコンの本流がタイの国境と別れて、大きく北に折れ曲るあたりから谷の様相がだんだん変わってくる。兩岸の山が川にせまってきて、まるで日本の和歌山県と三重県との間を流れる熊野川のような感じになった。岸のせまい、ネコのヒタイのようなところに、五戸、一〇戸と小さな部落がへばりついているのも日本的だ。何一〇平方キロという広い広い竹ヤブが現われた。同乗したラオスのお役人が、よくこのあたりで虎の群が発見されると教えてくれたので、目を皿のように注意して



いたのだが、これは失敗だった。

ビエンチャンを出てから約二時間近く、海拔二、〇七九メートルのラオビイ山を越えたところで王城のあるルアン普拉パンの町がみつかった。昔からルアン普拉パン王朝の都のあったところ。王城は街の中心の小高いところにあつて、クリーム色の城壁にかこまれていた。まるでオモチヤの城といった感じだ。この国の政府はビエンチャンにあるが、シサバン・ウォン国王はいまでもここに住んでいる。「王様に会いたい」というと、横にすわっていたラオスのお役人は「残念、それは駄目だ。王様はいまご病氣だ」と答えた。これも数年前にくらべると人口は倍になって一万を数えているという。

特別機はさらにナムカン川に沿って入って行った。ここから先は地図には一応描かれているが、正確なこととはほとんどわかっていないところだ。久保田団長は自ら飛行機の先頭に乘つて地図の修正をはじめた。そのながめは面白かった。兩岸にまるでカベのように一、〇〇〇メートルから一、五〇〇メートル級の山がせままっている。いふなればラオスの黒部川（富山県の川）だ。溶岩の切り立った絶景もある。われわれだけが見るのはおもしろいような絶景だ。だが、それを朝夕ながめている種族がいた。この高い山のテノベンのあちこちに、ヒソソリ部落をかまえているミャオ族だ。なか

には爆音に驚いて部落総出で、ボカンとながめているところもある。「こんな高いところを耕している」と安芸博士と感心した。「水くみが大変だろう」とのわたしの「同情論」に「いや、こんなところには必ず近くに泉があって、その限度の人数だけで部落を作っているにちがいない」というのが博士の「新学説」だった。ピエンチャンに帰って一泊した。

一月一九日 最後の空の旅である。タイとビルマと、ラオスの国境近くまで行った。この日は、残念なことに雲が多くて視界が悪く、調査飛行にとってはベスト・コンディションでは無かった。

しかし三国の国境で、とくにビルマとタイが細いメコンの支流で相対し、ともに兵舎がならんでいるのが印象的だった。恐らく日本人が、二度とこんな位置からここをながめることはないだろうと思うとつい感傷的にさえた。

ビルマや北ベトナムの国境に近いナムタア、ナムオウの両川は予想したよりゆるやかな流れだった。だが久保田団長は「沢山、よい開墾地点を見つけましたよ」とご気嫌だった。飛行機は無事ピエンチャンの飛行場に到着した。一万キロの空の旅は終わった。調査団は一兩日ピエンチャンで空からの調査結果をまとめたうえ、ジープによる踏査に移る。わたしは二〇日にここを出発して先に日本

に帰る安芸博士に原稿を託さねばならぬので大急ぎ仕事にかかる。今夜は徹夜だ。われわれの泊ったセタ・パレス・ホテルはこの国第一のホテルだが、実にお粗末だ。蚊になやまされながら原稿を書く。電燈もほのぐらい。弱ったことだ。

一月二〇日 ウカツな話だが、ビエンチャンに来てみて南ベトナムのツアー、ユエの緊張の理由がやっとわかった。南ベトナムのクワントリとラオスのサバナケットを結ぶ道路上のラオス側にチエボンという村がある。その付近まで、北ベトナム軍が約二個中隊、先月の二三日から二九日の間に侵入してきているという。

理由はラオスの飛行機が六回国境を越えて北ベトナム側に侵入してきている。しかも、もともとここは北ベトナムの領地だと主張するのだそうだ。当地の外交筋はラオスにいる北ベトナムからの避難民を収容する門を開くためとみていたが……。

それはともかくとして不思議なことはこのラオスの首都ビエンチャンに南ベトナムのツアー、ユエのような非常事態といった空気が少しもみられないことである。調査団が到着した一九日の夜も、われわれの泊ったホテルの前で、陸軍大臣の結婚式の披露宴が行われ、夜遅くまで各国代表を

招いてにぎやかなダンスパーティーが深夜まで開かれていた。ラオスの軍隊は二五、〇〇〇人、北ベトナム軍は二〇万人いる。どうせ勝味はない。それに北ベトナム軍も本気で戦火を交えるつもりはないとみているからだそうだ。

それに当地には新聞らしい新聞も放送局も無い。新聞らしいものは政府が発行するガリ版ズリの日刊情報と二、三の週刊紙があるだけ。だから国境の争いなど大衆はほとんど知らないからというのが在留邦人の観測だった。

われわれがすでに回ったメコン沿岸の三方国の首都はいずれもここ数年の間に大変な人口のふえ方をみせていた。しかし、ここ(ピエンチャン)ほどひどいところも無いだろう。つい四、五年前の独立前後にわずかに一万人前後だったこの街が、ラオスのお役人にいわせると一〇万人、在留邦人の推測でも六、七万人になっている。しかもその人口構成が面白い。お隣のタイ国人が約三万人、ベトナム人がおよそ一万人、中国人は四、五、〇〇〇人、フランス人も二、〇〇〇人、残りがラオス人というわけだ。

しかも中国人とフランス人をのぞけば大半が最近ピエンチャンにやってきた者ばかり。特にはげしいのはメコン川ひとつをへだてて国境を接しているタイからの密入国である。政府が時々取締っ

てタイ国側に引渡すが、その夜のうちにすぐ越境してきてしまうのだという。街にみかけるサムロウ（三輪車）運転手がほとんどこのタイ国人だ。西欧人も三つの国の街ではいちばん多くみかける。みんな年間四、五〇〇万ドルないし三、五〇〇万ドルといわれるアメリカの経済援助資金の關係者と、これを目当てにひともうけをたくらんで来た人たちばかりである。

もうひとつ奇妙な現象は乗用車が猛烈な勢いで増加したことだ。つい数年前、ここはタッタ四台しかなかった。それがいまでは四、〇〇〇台を数えているというのである。人口を仮に一〇万人としても二五人に一台だ。自家用車の増加、それにもなう交通事故をなげいている東京でも普及率ではとうていかなわないだろう。その自動車の持主の大半がラオス人というのは当然のことだが、それも政府のお役人、軍隊、警察、豪商といった順序。「どうして車を手に入れたか、この順だけあげたらわかりませう」と、ある外国人はニヤリと笑っていた。

つまりソデの下である。ニッパハウスのようなボロ家の横にまで、必ずといってよいほど車がある。市内の目抜き通りにあるフランス人経営の学校のひけ時には校門の前が出迎える車でいっぱいになる。あまり多過ぎて、市内もノロノロしか走れない。この点では東京そっくりだ。

もっとも車の種類となるとアメリカ製の大型車はほとんどない。もっぱら、中、小型のベンツ、

シトロエン、フォルクスワーゲンといったドイツ製が幅をきかせている。「安くて良い」というわけだそうだが、メコン川の川筋の商人といわれるラオス人の経済観念の象徴かもしれない。

一月二一日 きょう団員はビエンチャン平原はじめビエンチャン郊外のカンガイ状況、小水力の開発地点などの視察に出掛けた。筆者だけ残って市内を視察することにした。

電話で東京銀行のビエンチャン支店を呼び出し、案内をたのもうとしたがなかなか出ない。やむを得ず車で東銀にかけつけた。この話を支店長にするとみんな腹をかかえて笑う。何故かと聞いてみるとこうだった。市内の電話の加入者は二〇〇足らずだが、この電話局には交換嬢がたった二人しかいない。おまけにしほしほお休みするので、うちのあかない場合にはまず電話局へ出かけてゆき「つないでくれ」と申込んだうえ、やおら家に帰ってから「モシモシ」とやるのだそうである。電話のついでに水道の話をすると、この方は最近日本が、ラオスが賠償を放棄してくれたお礼に、同市にプレゼントする約束になっている。ところがこの話合いがなかなか進まず、その間に流行病が発生したりなどして一時はどうなることかとあやぶまれた。最近やっとその手続きが完了、近く工事を開始する運びだという。

ラオスの婦人はよく働く。というよりメコン川沿岸の婦人はよく働くといった方が正しいのかも  
しれないのだが……。まだ夜の明けぬうちに、ピエンチャンでメコンの川岸に立っていると、にぎ  
やかな叫び声を川面にひびかせて、タイ側から続々と舟が着く。お客様はみんな女性ばかり。た  
だしいずれも手に手に大きな荷物を持っている。服装もお粗末だ。タイ側からの売込み部隊である。

これが街の中央にある市場にくり込んで思っているように、川岸には税関もあって、ときど  
き目にあまる荷物の「密輸」には注意しているようだが、彼女らの商品は大半が野菜、米、肉類と  
いった食糧と簡単な日用品なので、まずはフリーパス。とにかく市場はまるで、戦争直後の日本の問  
市場そっくりの風景だ。なんでもある。つい数年前までヘビやカエルまで売っていたというが、い  
まはさすがにない。それでも木の葉のようなものを堂々と商品として並べているのにはあきれた。

ピエンチャンは、メコンの河口から約一、五〇〇キロもある奥地だ。ピャクダンの巨木がしげり、  
黄ゲサを着たお坊さんのタクハツして回る姿もみられる。寝シヤカで有名な仏像はじめ、古い仏教  
の遺跡もなかなか多い。タンネンに回っていたら恐らく、こんな狭い街なのに、一日ではみきれな  
いだらう。そういう意味では日本の古都、奈良と一致したものも持っている。

しかし一方、新政府がふるいはじめた建設のツチ音も高い。それは西部劇そっくりな新開地風景

だ。かつてわずか四人で発足した大蔵省が、いまでは二〇〇人の大世帯に発展した首都である。総合官庁舎街も生れつつある。メコンの明日を象徴しているかのように、街には活気があふれている。

ここでベトナム、ラオスの日本人についてふれておこう。ベトナムの日本人はザッと三〇〇人と  
いわれる。そのうち一〇〇人が商社員、一〇〇人が技術者、残りの一〇〇人は現地で復員した元兵  
隊さんが多く、写真屋、薬屋、運転手、通訳などをやっている。ツーランに泊った一夜、この元復  
員軍人の一人に会った。ほのぐらい中国人の酒屋で偶然会ったのだが、ひじょうになつかしがつて  
「是非、家に来い」というのでついて行ったのだが、そのお粗末なのが少しあわれだった。福島県出  
身の元衛生兵、いまではツーランの街でドクターとしてとおっている。しかし正式の医者  
の免状を  
持っていないので、医者  
の診断によって患者に薬を調合してやっているという。ベトナム人の夫人  
もおり、家族は夫人のほかに、子供二人、夫人のお母さんと四人ぐらし。時々日本に帰りたいと思  
うが、日本での生活が不安で踏み切りかねているらしい。この人の話ではこの付近にまだ五人の日  
本人がいる。二人はツーランから約五〇キロほど離れたところで道路建設の監督をやり、二人はツ  
ーランとユエで、保安隊や警察に柔道を教えている。いま一人は沈船引揚げに戦後ベトナムにやっ



できた大阪の北川産業の従業員だった青年、いまではツーランの中国人が経営する酒屋の番頭さんである。

サイゴンの日本大使館の調べでは、変り種はアメリカ人と国際結婚した婦人たちで、サイゴンの街に二〇組もいる。

コロンボプランによる漁業、織物、陶器、砂船関係の技術者の活躍も目立つ。元海軍技術中將の清水文雄氏ら一五人は、サイゴンの海軍工廠で艦船の修理をやっていた。

ラオスの日本人は非常に少い。元日本兵が二人、一人は東京銀行のビエンチャン支店で渉外係をやっている。この人の、ラオス政府における顔は相当なもの。何時の間に、こんなにか売出し"たかは本人もあまり語りたがらなかったが、大臣クラスのところにも、平気でノコノコ出掛けて会っているようだ。いま一人は、ラオス陸軍の大尉になっている。タケク市の元市長のお嬢さんを夫人にもらい、サバナケットの軍隊に勤めているという。しかしこの人たちよりビエンチャン市民に親しまれているのは名古屋出身の小川蔭太医博だ。約五〇人の患者を収容する病院を経営し、小川博士のほかに日本人の医者が二人、産婆と看護婦も一人ずつ日本女性である。毎日五〇人ぐらいの患者が押しかけてきて、政府の要人の間でも信用を博していた。ビエンチャン市内の日本人は約四

○人、その大半が商社員、残りが技術者、大使館のお役人といったところである。調査団はいよいよ明日から陸の旅に出発する。

一月二二日 いよいよ陸の旅のスタートを切った。ピエンチャンからジープで約三〇分、東に進んだところでメコン川の本流を渡り、タイに入った。

メコン川はこのあたりでは川幅およそ六〇〇メートルばかり、いまは乾季なので川岸から舟の着くところまで約二〇メートルほどの川底に下りなければならぬ。渡ったところがタイのノンカイ県だった。

タイ国政府の好意でバスが提供されたので、ジープに乗らずにすんだ。これは団員一同をホッとさせた。というのは、わずか三〇分の旅だったが、付近一帯は赤土地帯、しかもその土が細かいので、一度車が通るともうもうと赤い砂ボコリをたてて一寸先も見えなくなる。朝、さっぱりした衣服に着換えてきた団員一同、まるでトンカツのようにすっかり砂ボコリで真赤にそめあげられていたからである。

ところでこのバスが面白い。エンジンは機械類は輸入品だが、ボディはタイ製とあってチャチな

家の柱ほどあるチーク材のワクが使つてある。天井にも太いハリが二本、だから屋上は結構荷物台になるという仕組みだ。というより、下が満員になればここにもお客がかけ上る。われわれのバスは、団員一同の荷物をすっかり積んで、まだ警備の兵隊さんまで乗せていた。

ノンカイ県のあるコーラート高原はタイの東北部にある。いうなれば日本の北海道といったところだろう。もちろん気候は大分ちがうが、いまはいちばん涼しい時だから、まず北海道の夏といった程度である。

北海道の端をみて、日本を批判すれば日本人が怒るだろう。それと同様にこの国境の街をみて、タイ国をウンヌンするのは失礼に当るかもしれない。でも、ここにきて第一に感じたのはタイの国民が制服がお好きだということだった。税関も、県庁も、水利局の職員まで、お役人はすべて日本のお巡りさんそっくりの制服を着ている。ノンカイ県の副知事さんの肩には、昔の海軍中佐のソデ章を小型にしたようなのが乗っかっていた。

小学生もおそろいだ。女の子は紺のスカートに白いブラウス、男の子は、カーキ色の半ズボン。ここまではよいが、男の子も女の子も、白いヘルメットをかぶっているのには恐れ入った。しかしこういった制服はタイという国の国力を感じさせる。メコンの流域でいちばん政治が末端まで行き

とどいているのはタイ国ではないかというのが、わたしのタイに対する最初の印象だった。

久しぶりにノンカイで汽車をみた。ディーゼル機関車のスマートなバンコック行急行だった。

バスで小一時間でウドンに到着した。街の中心街で食事をしていた時のことだった。急に、にぎやかな「お富さん」のメロディーが聞えてきた。みんな非常になつかしかったので早速その原因を調べてみた。しかし結果はがっかりだった。タイには人の心をひきつけるようなメロディーが少い。ほとんどが仏教音楽である。日本でいうなら、田舎の老人があげるあのご詠歌調のものばかりだ。そこで景気の良い「お富さん」をなんとなく、店の宣伝にかけているに過ぎないというのだった。

ウドンは人口五万ぐらいの街だが、ウドン県の副知事は「二〇人も日本人がきたのはここ一〇数年来無いことだ」という。だから、こっちの方が完全な見世物。街を歩くと、群集の方がぞろぞろついてくるのには閉口した。

タイの東北部を、コーラート高原と呼ぶことはすでに書いた。タイの九つある行政区劃からすれば、第三、第四地区に当るが、面積は約一八万方キロ、人口は八〇〇万人だから、面積では日本の約二分の一、人口は一〇分の一、従って人口密度はザッと五分の一ということになる。

しかし耕地面積はわずかに全体の六パーセントしかない。土地そのものは、北西部が海拔約二〇〇メートル、東部が五〇メートルで、大きな起伏も無し、なだらかな平原になっている。雨量は年平均一、三〇〇ミリ、ちょうど日本の関西地方ぐらいだが、大半が五月から七月の雨季に降って、あとはほとんど雨具というものがいらぬ。だから乾季はひどい。調査団がこの地方を調査する目的も、メコンの水をこの高原にみちびけば、どれだけカンガイに役立てることができるかということだった。ウドンに一泊した。

一月二三日 ウドンは第三地区の中心だが、この日の視察で、乾季というものは恐ろしいものだということを、しみじみ感じさせられた。郊外にある収穫後の田はひび割れ、道路はもうもうと砂煙をたて、自動車が出づいて走ると、後の車は砂ボコリをかぶるだけではない。一寸先も見えなくなってしまう。林のカツ葉樹はほとんど枯れて葉を落している。この風景だけからすれば日本の冬だ。亜熱帯地方だからもちろん温度の差は日本ほど大きくないが、まさしく冬である。

ウドンには水道もあるのだが、それに頼りきれぬのだろう。われわれが泊った中国人経営の宿屋にもデンカイ雨水をためる貯水槽があった。お役所はもちろんのこと、ニンバハウスにさえこの施

設のしてあるところがある。

タイ国政府もこの問題にかなりの手を打っている。この日も、二、三の施設をみせられた。多くはメコン川の支流のまた支流に、長さ一、〇〇〇メートルぐらい、高さ一〇メートルぐらいの土の堤防を作り、付近の森林や湿地帯に水をためて、五〇〇ヘクタールから、一、〇〇〇ヘクタールの田をうるおしている。しかし全体からすればもちろんわずかなものである。

夜、ウドンの街で小屋掛けの田舎芝居をみた。こちらにはタイ語はさっぱりわからぬが、どうやら仏教思想を基調とした勧善懲悪物語らしい。俳優の手が、しなやかにまがりくねるのだけが印象に残る。小屋掛けのうすぎたないには閉口した。

宿に帰ると、タイのお役人がもういちど夜の街を案内するという。「君の国は売春禁止法が施行されているではないか」というとニヤニヤ笑う。こんな田舎街にも夜の女のいるのには驚いた。

一月二四日 ウドンからラオスのタケクの対岸ナコンバームまで約二〇〇キロを、およそ八時間でフツ飛ばした。乗ったのは例のチークでできたバスである。

一同悪路を予想していたのだが、幅二メートルぐらいの補装こそしていないが、立派な道路が

チークとカツ葉樹の密林を縫って続いている。途中の橋はまだほとんどコンクリートにかけかえなかったが、その立派さにはビックリした。これはもちろん、アメリカの軍事援助でできたもの。対共産国との、きびしい対立が生んだ産物だったわけである。この沿道にもいくつかの貯水池があって、タイのお役人は抜目なくそれに案内してくれた。ところでひとつの発見は、その貯水池の付近で必ずといってよいほど塩の製造をやっていることだった。塩分を含んだ土を水にとかして、塩水だけをこし、それを煮つめるのだが、その濾過器が太い木の中をくりぬいた長さ一メートルぐらいの簡単なもの。カゴ六杯の土から一杯の塩がとれるそうだ。海水の四〇分の一に比較すれば非常に含有率が高いが、コーラート高原に岩塩がどれほど埋蔵されているかはまだわかっていない。

サコンナコンというところに立寄って昼食をした。霞ヶ浦ほどの潮水に面した街である。桜のような白い花、赤、紫、黄色などの名も知らぬ草花が咲き乱れて実に美しい。湖岸には水牛、牛、馬などの放牧場もある。実にノドカな風景だった。

途中、お寺の縁日に会った。屋台店も出ている。売っているのははずこの世界も同じ、食べ物にオモチャの類。しかしその食べ物の名もついにおぼえるヒマが無かった。夕方ナコンバームに着いた時には、道路に敷かれたラテライトの砂煙で、みんなの服もシャツもまたまた真赤にそまっ

まっていた。一同グッタリしている。メユンの本流を渡ってタケクに着いた。宿はバンガローと呼ばれるフランス統治時代の宿舎だ。さて弱ったことにベッドの数が足りない。ダブルベッドだったのを幸いに、止むを得ず一つの寝台に野郎が二人ずつ寝ることになった。

このバスの旅に色どりをそえたのは、ウドンの夜の女が同乗してきたこと。団員一回「タイのお役人の女性だろう」とささやきあったが、ついに結論が出なかった。

一月二五日 久保田団長の「虎に会えるかもしれませんよ」という言葉につられて同行したのが運のつきだった。タケクから北ベトナムのビンに通ずる道はまさしく悪路の世界的見本というところだろう。道などといったしろものではない。草が生えてない、人の通ったあとがあるというだけのもの。凹凸はいうまでもない。ジープの天井に頭をぶっつけて、一時間に四つや五つのコブを作るのは朝飯前だ。しかも道路が悪かったただけではすまなかった。途中の川にかかっている鉄橋はすべて破壊されていて、ジープは仮橋をオッカナビックリで渡るか、川の中にジャブジャブ入って行かなければならない。約一〇年前、ベトミンの独立戦争の時、フランス軍がぶっこわしたままになっているのだという。ラオス政府は「いつベトミンのゲリラが出てくるかもしれないので……」と



わざわざ六人の警察軍を護衛につけてくれていた。

虎にはついにお目にかかれなかった。しかし熊に会ったこと、大きな象の足跡を発見したのが、この日の収穫の第一。いやこの日、調査団はこんどの旅での最大の成果を納めたのだった。

タケクから約一〇〇キロ、バンシィニョという部落の近くでメコン川の支流、ナムテン川の流量を測った結果、渇水期だというのに、一秒間に四〇トンから五〇トンの流量があった。ダムを造るのに非常に良い地点もみつかった。バンシィニョの下流約五キロのところだが、ここに高さ約七〇メートル、長さ二〇〇メートルのダムを築けば、この谷間に約三〇億立方メートル（日本の佐久間ダムの約一〇倍の水量）の水をためることができる。これをセバンファイ川に流域変更すれば、約三五〇メートルの落差を利用して最大出力六〇万キロワットの発電ができるとの自信を得たことだった。途中珍しい林にぶつかった。松の木がまるでスギやヒノキのように高さ二〇メートルぐらいいまっすぐにそびえ立っている。それが無数に生えている。われわれ日本人の常識では松の木とはまがりくねったものと考えていたので、最初はこれが松の木といわれても、にわかには納得できなかった。あちこちに落ちている葉はまさしく松の葉だ。幹もよく見れば松の幹だ。一回しばらくキツネにつままれたような表情だった。

この夜もタケク泊り。また野郎二人ずつの同キンである。

一月二六日 サバナケットに向う。この日は旧フランス統治時代に造った道を走ったので旅は比較的快適だった。途中セバンファイ川で、また流量の測定をやる。

ここまできて気付いたのは川にかかった橋には必ず番兵がいて、その付近には一個分隊ぐらいの軍隊が駐屯していることだ。しかも面白いのはその兵舎に奥さんも同居している。セバンファイ川のところではこの軍隊がノスキに木陰で竹ケズリをやっている。よく見ると長さ三〇センチぐらいのヤリのようなものを作っていた。これを幅三〇メートルぐらいのところに無数に植えつける。つまりバリケードの一種である。ちょうど前に作ったバリケードがくさりかかったので作りかえているとのことだった。

サバナケットは軍都だった。一個師団ぐらいいるらしい。街は非常に活気を呈していた。ここで調査団は明日から二隊に分れることになった。一隊はカンボジアに向い、一隊はコーラート高原をもういちど調査する。

陸の旅もすでに五日間、隊員も大分疲れている。というのはわれわれの調査旅行は非常に強行軍

だからである。一日に二〇〇キロから三〇〇キロ走る。ただ走るだけではない。主な川に到着すると測水、流量の測定という作業が待っている。夜、宿舎に着くと各国の係官との打合せを行わなければならない。連日、朝は五時起き、夜は一時就寝という日が続き、団員の大半がわずか五日間の日程で、疲労と氣づかれでグロッキーになってしまった。

みんなの驚異だったのは七〇歳近い久保田団長の元気なこと。常に団員の先頭に立って、苦しい日程を強行する。そこでいつしか「メコンの鬼」というニックネームができてしまった。

こういう苦しい中で団員たちをなぐさめてくれたのは四カ国の協力ぶりだった。四カ国は調査団に一人か二人の苦い技師を同行させていた。ベトナムの場合は、自分の国とカンボジアだけだったが、その他の三国は他の国にもいっしょについてきて勉強した。そして自分の国に入ると税関の手続き、宿舎から自動車の手配、資料の収集とすべて献身的にやってくれる。こんどの陸の旅でいちばん気の毒だったのは、われわれが「ラオス坊や」とカゲで呼んでいたカムイン君だった。フランス留学六年、最近帰ったばかりで、国内の事情もよくわからぬというので負担がいっそう重かったようだ。タケクからバンシニョに行った時など、「昨夜は三時間しか寝なかった」と、われわれがゆれて頭にコブを作っているジープの中で船をこぐこともあった。

われわれが不思議に思ったのは国交を断絶しているはずのタイとカンボジアの技師たちの仲のよいことだった。お互いに ECATE (国連アジア極東経済委員会) の会議などで顔見知りだったこともあるだろうが「メコンのことはケンカすることはできない」という。宿舎もたいてい同じところにとって、夜の散歩までいっしょにしているのは日本人には理解できないことだった。

この夜、明日から二隊に分れるというので、ささやかな別れの宴を開いた。その席上のことだった。外国人技師の中でいちばん年長とみられるタイのニチバット技師は、こういう演説をぶった。「われわれは、東南アジアの人間として、メコンの開発調査がアジアの兄弟の国である日本の手によって行われたことを非常にうれしく思っている。すでに一〇余日間、みなさんに同行して、その働きぶりの熱心なこと、技術的にすぐれていることに深い感激を受けた」と。

多分にお世辞もあつたろうが、カンボジアのチャンベック君もすぐこれに同調した。もつともニチバット君はなかなか茶目なところもある。かつて東京に一カ月滞在したことがあるので、日本語の「落つるね」という言葉を知っていた。団員がノビルたびに「貴方落つるね」とひやかすので、日本側はさんさんだった。調査団が果たした最大の功績は四カ国との親善だったといえれば皮肉になるだろうか。サバナケットにも夜の女がいた。ラオスにも売春禁止法はあるはずなのに……。

一月二七日 サバナケットからバクセに向う。道は例の、フランス統治時代の産物だから悪くない。旅はむしろ快適といった方が当るかもしれない。しかし道の両側はただ密林だけ。「敵におそわれ、ポカンとやられてこの密林に逃げられたらおしまいだ」と団員がなげくほどである。だが景色の方は単調なので少し弱ってしまった。メコン川の近くを走っている場合もあるのだが、この密林のおかげでその様子は一切うかがえない。「メコン川の調査団がメコン川を見ない目だ」と笑っていた。途中セドン川に立ち寄って測水をした。

バクセはこの国第二の街である。人口は、物の本には人口三、〇〇〇あまりと書いてあるが、どうして、どうして、この街のお役人は「約五万人」と自慢していた。

午後、バクセからさらにバクソンに向けて出発した。

「日本人がメコン川の流域からやってきたという学説がある」と、建設省の吉川団員とジープの中で話していたら、不意に伊勢神宮にある千木のようなものを屋根にのせた民家があってギョッとした。単なる類似か、あるいは何かのつながりがあるかは知るよしもないが「これは面白い」とひどくこの風景にひかれた。というのは、これから行くバクソンの街とはポロベン高原にあるこの国の避暑地だ。日本なら差当り軽井沢にあたる。ところでラオス政府は、ここへ日本人の移民を大量に

迎えたいといっている。とにかく「ここに日本人が移民するとすれば、それは古巣に帰ることになる」と笑いあったことだった。

ポロベン高原は海拔、平均一、一〇〇メートル、雨も多い。たしかにバクセから高原への道の両側は、いままでながめてきた、ラオスの自然の猛威に屈した、広漠とした風景とはちがっていた。乾季だというのに、土にしめり気がある。バナナ、パイナップル、茶、コーヒーといった作物の畑も比較的多い。野菜畑もみつかった。農家の庭先には、実は小さいが、ミカンも黄色くみのっている。団員一同、なんとなくほっとした表情だった。

高原の街、バクソンの入口に国立の農事試験場があった。ウグイスの鳴き声も聞こえるノドカな風景だ。二人の技師をつかまえて聞いてみた。答はこうだった。

ポロベン高原の耕作可能面積はひかえ目にみて六、三〇〇平方キロ、その約三分の一が既に開墾されたか、これからされようとしている。気温は年平均二二度、最高は五月ごろの二四、五度、最低が一二月の一八度、しかし時に零下何度という寒波が襲ってきて氷が張ることもある。

雨も昨年は三、六二三ミリ降った。最高は七月の八九〇ミリ、一月と二月には無かったが、その他の月には二〇〇〜三〇〇ミリから六〇〇〜七〇〇ミリ降った。例年大休同じような傾向を繰返す。

適した作物は茶とコーヒー、その他いろいろの野菜も作れる。試験場の指導と国の補助で、現在一五家族のラオス人が付近の山林の開拓に当たっている。コーヒーも茶も収穫のあるのは大体四年目から。開拓地ではすでに一部の地域で収穫があり、コーヒーの収量はおよそ一ヘクタール当り、五〇〇キログラム、一キロについて四〇ないし五〇リエル（一八〇円ないし二二五円）で売れる。試験場では将来四五家族程度にふやしたいと思つてゐることだった。

バクソンの宿舎は、かつてフランス人が寮的な避暑生活をしてゐたところだけに調度品は実に立派だ。しかしいまはその主がいないので、どことなくわびしげだ。非常に寒い。二人分の毛布をひつかぶつて寝た。

一月二八日 かつてフランスの統治時代に、この高原に約一六〇家族のフランス人が入植してゐたという話がある。だが、いまここで農園を経営してゐるのはわずかに二組だけだった。

外務省の木村団員とその二つの農園を訪れてみた。ひとつはフランスのリヨンの北のディジョンの出身であるクワインさん（五八）をリーダーとするウーアイ農場で、茶二・五ヘクタールとコーヒー一〇ヘクタールを作つてゐた。クワインさんのほかにフランス人二人とラオス人二人が働いて

いる。茶は一キログラム当り五〇〇リエル（二、二五〇円程度）に売れる。しかし一九五四年に零下七度という寒波が襲って、コーヒーの木がほとんど枯れてしまったので経営は苦しいようだ。

クウィンさんは農園を案内しながら「これも枯れた」と、枯れ枝をポキリ、ポキリ折りながら、いかにもくやしそうにこぼしていた。総収入は年約一五万リエル（およそ六七万五、〇〇〇円）ラオス人の給料は一カ月九〇〇リエル（四、五〇〇円ぐらい）ほかに毎月米三〇キログラムを支給するそうだ。

もう一組は元軍人のジャーン・クードーさんの農場である。クードーさんは不在だったが太平洋戦争中、サバナケットで日本人のコックをしていたという使用人のラオス人に案内してもらった。水牛を二〇〇頭飼ひ、高級野菜の多角経営をやっていた。耕作面積は七ヘクタール、イチゴ、セロリ、茶キャベツ、赤ダイコン、グリーンピース、トマト、花類などを作り、ビエンチャン、バクセなどと電報で取引きしている。お客様はアメリカ、フランス人や政府の要人。まだはじめてから数年にしかないが、こちらはかなり成績が良く、クードーさん一家の生活もかなりゆとりがあるようだった。使用人の話では、この付近には虎もいる。クードーさんの家には、畑に侵入してきた虎を射止めた大きなハク製がカベにはってあった。



ポロベン高原は、縦断するだけでも、ジープで平均二〇キロで走って、三時間近くかかる広い地域だ。谷川には乾季だというのに、かなりの水もあって、出力一〇キロワット程度の発電所も建設中だった。調査団の狩野団員は、谷間なら乾季にもかなりの水が得られ、米作もできると判定した。去年外務省が派遣した移民調査団も「絶好の開拓地」と報告している。

だが、木村団員とわたしの結論は少しちがっていた。土地によっては地味がやせたところもあるのではないだろうか。それに消費都市ブノンベンから直距離にして五〇〇キロ、ビエンチャンからは六〇〇キロも離れている。飛行機で運べる程度の高級野菜なら商売も成り立つが、大量の農産物となると運搬が大変だ。採算がとれないのではあるまいか、という疑問である。

ポロベン高原をあとにしてバクセにもどる。ここでまた一泊する。高原の避暑地で一夜を過ごしてきた反動も手伝って実に暑い。ねむれぬままに夜の街を散歩する。

メコンの流域を歩いてみて、いまさらながら感心するのは中国人の経済力である。バクセでも例外ではなかった。街の中心街の商店経営者はほとんど中国人である。いやバクセだけではない。沿岸の中心都市はいうにおよばず、わずかに十数軒の小さな部落でも、店があると、必ずそれは中国人の経営だった。現地の人がやっているのは、せいぜい名所旧蹟のみやげ物屋ぐらいである。

ところで、この商店がまた変っている。ほとんどがよろず屋だ。日用品から高級雜貨まで、どの店をのぞいてみても同じような商品を売る店が軒をつらねている。しかもその商品が世界一流の品物だ。例えばフランスのコチエーの香水から、ドイツのツァイスのメガネ、アメリカのバーカーの万年筆に、ラックスの石ケンといった具合。ラノキーストライク、キャメルといったアメリカタバコも必ず持っている。ただしお値段は大体、東京での正式輸入品の一と二割高。もっとも店によっては値段は多少ちがう。バクセでのこと、オーストラリア製のライターが、ある店では七〇リエル(三五〇円)といい、もう一軒では四〇リエル(二〇〇円)で売っていた。

ラオスの沿岸の諸都市にこのように外国商品が多いのはこういうことらしい。ラオスの外貨の交換率は昨年一〇月まで一ドル三五リエル(実際価値は約一七五円)だった。しかも輸入の外貨割当が比較的ゆるやかだった。つまり一七五円ぐらいしか価値のない三五リエルを準備して、輸入許可さえもらうと一ドルの品物が買えた。ところが対岸のタイの交換率はこれより高率だった(一ドル約一八バーツ、三七〇円ぐらい)ので、タイに流して大もうけができた。しかし一〇月から一ドル八〇リエルになったので、このウマ味は一朝にして消えてしまった。つまりならんでいた外国商品はいずれもその時の売残り品。そのためか、どこでも商品のあるわりに店はわびしかった。

一月二十九日 いよいよきょうでラオスともお別れである。通関手続きが手間だったので、バリセ出發は予定より約一時間おくれ、九時近くになった。

国境でコーンの滝をみる。幅約四キロ、高さ二〇メートル、中央に多くの中島がある。従って流れはその島によって分流されている。メコン川が水運の便にあまり役立たぬのはこの滝があるためであるともいえる。本流開発計画として、ここにダムを築き、バナマ運河式にして水運の便に資すると同時に発電をもやろうという計画がある。もしこれに手がつけられれば、恐らくメコン川開発の最大のヤマ場となるだろう。だがその実現となると資金量、資材など多くの難問題が山積しているようである。

いまは乾季だというのにその流量は実にすさまじいばかり。ナイヤガラの滝というものを見たことはないが、おそらくそれに勝るとも劣らぬ景観といえるのではないだろうか。

熱帯の太陽に照らされて、白い水の流れが無数のニジを現出しながら流れ去るのをあかずにながめていると、「早く行かぬと予定に遅れる」とせき立てられて、滝をあとにした。

このちかくで無数の焼林作業をみた。時に三〇分ぐらい車を走らせる間も続くものもある。カー族の焼林耕作だが、ひとかかえもあるような巨木がメラメラと火をふき、見渡すかぎり火の海が続い

ているのは、いうにいえぬ無気味さを感じさせられた。正午過ぎ、メコンの支流を渡って、スタントレンに着いた。午後、調査団はセコン川の調査に向ったが、わたしは原稿の準備のため宿舎に止まった。

夜、カンボジアの代表と種々打合せを行なった。カンボジア側の調査してほしいと申入れた地点があまりにも多いので、ここでまた調査団は二個班に分れることになった。

わたしはカンボジア全体をもう少し勉強したいので、ブノンベンに直行することにした。徳野団員が「君の独立小隊を入れると三個班だ」といって大笑いした。

一月三〇日 クラチェに向う。このあたりでも焼林作業が続いている。間もなく水田地域に入ると、バナナ、カボックなどの栽培地域も多く見られる。

本流のいまひとつの開発予定地点、サンボアはクラチェの上流三〇キロの地点にある。左側の丘陵地にダム的一端をとりつけ、高さ三〇メートルのダムをきずこうというわけである。ここにためた水は発電に利用するほかこの水をカンボジア平原に導いて大規模なカンガイをやらうという計画もある。とにかく巨大な夢の計画だ。この計画が、付近のニッパハウスとどういう風に結びつくの

か、ふとこんな疑問が浮かび上ってきたのだが……。

クラチエに入ったのは夕方五時近く。宿舎に入った瞬間、街の中央でラッパがなりひびいた。するといままでがやがや騒ぎながら通行していた群集が、いっせいに立ち止まって直立不動の姿勢をとった。国旗降下に対する敬礼だという。もっとも例外は認められているようだ。この国の特権階級である坊さんはこの敬礼に加わらなくてもよいらしい。ラッパの音も知らぬげにスタスタ歩いているのは面白かった。

この国の首相であるシアヌーク殿下は中共びいきといわれている。というより中共的政策を行なうのが好きだという方があたっていかもしれない。とにかくこの国旗に対する直立不動もどうやらそのひとつらしい。

街に中共製の映画も上演されている。中共製のタバコもあった。中共の勢力がかなりカンボジアに入ってきていることは否定できない事実のようである。

一月三十一日 どうも体の調子がおかしい。食欲も無い。ちょうど日商のブノンベン事務所の主任が乗用車を持ってきていたので、これに便乗してブノンベンに直行することにした。途中ゴム林を

みる。昔はフランス人の経営だったが、いまはカンボジア人の手に移っている。しかし肝心の木が大分老齡期に入ったので成績は必ずしもよくないようだ。

トンレサップ川の付近で面白い風景に出会った。片方で稲刈り片方で植付けという光景である。残念ながら一枚の写真に入るほど近くはなかった。泥水の中で人間と水牛がともに水浴している。あれで病気になるぬとは不思議だと思った。ブノンベンの宿に着いた時には本当にホッとした。欲も得も忘れてベッドに横たわってしまった。下痢が続く。薬局でテラマイシンを買って飲んだ。体に全然力が無い。

二月一日 中国人経営のホテルで寝ていると、本社から陸の旅の巻の原稿を至急送れとの電報が大使館経由でとどいた。体の調子も少し良くなったので散髪をして、原稿にとりかかった。夕刻調査団のA班が到着した。夜、原稿を書いていると、女中がやってきて「姑娘はいらぬか」としっこくすすめるのには弱ってしまった。聞けば、女中さんにもリベイトがあるのだそうだ。

二月二日 「チュイチャンパーは面白いところですよ。是非行ってらっしゃい」と大使館のすず

めで、まだ少し体の調子が悪かったが思い切って出掛けた。

チエイチャンバーは、メコン川の支流トンレサップ川をはさんでブノンベンの対岸にある。中国人カンボジア人、ベトナム人、マレー人が、おのおのの宗教を固執しながら部落を作っているところだ。中国人は道教の廟、ベトナム人はキリスト教の教会、カンボジア人がお寺、マレー人は回教の礼拝堂といった具合。ここに渡って乗った古風な馬車のカンボジア人の馬車ひきは「四つの人種がお互いに愛しあっていない」と説明してくれた。

この地帯が象徴するように、メコンの沿岸は、国がラオス、カンボジア、タイ、ベトナムと別れていても、お互いが入りまじって住んでいる。ただその国の地域になるとその国の人間のパーセンテージが高いというだけである。このほかマン、メヤオ、スン族といった少数民族もまじっていて、文字通り人種の宝庫であることは今も昔も変わらない。

その中で一目でわかるのはベトナムの女性である。白いズボンに色とりどりの上着、その上着は立エリで、腰のあたりで割れ、しかも長く、ほとんど下にはいっているズボンがかくられるほどだ。あんなにフランス時代が長く、最近はアメリカ人の影響を受けているはずなのに、ガンとしてこの服装をかえようとならない。保守的なのか、ほかに意味があるのか。ベトナム政府のお役人は「いや、

安くつくからですよ。ツーピースなら二着しかとれぬ布でこれなら三着できるからですよ」といっていた。とにかく白、桃色、水色と色もあでやかなので、遠くから見ると「美しいなあ」と思わずみとれる。このチュイチャンパーでもそんな光景に出会って、カメラをむけたところ、ふりかえった顔が案外のおばあさんなのにガノカリしてしまった。

案内してくれた大使館の人がニヤニヤ笑いながら、「いや、この服装にも変化があるんです。最近の流行は、エリがますます高くなったこと。ピタリ腰につくように作り出したこと。それに都会ではツメをそめ、バーマネットをあて出したことですよ」とつけ加えた。ベトナムの女性の顔はたしかに日本人に似ている。服装さえ変えさせれば、東京の銀座を歩かせても見分けがつかないだろうと思ったことだった。

ラオスの婦人の服装にも特徴がある。ツーピースだが、スカートには必ず、紺かコゲ茶か、濃いグリーンといった暗色を使う。外出用の晴れ着には、スカートの下部に金か銀でフチ取りがしてある。肩には黄色かまたは赤色の肩掛けが乗っかっている。これにくらべるとカンボジア婦人の服装は比較的質素だ。ソデの短い上衣と黒いロンジー、頭には色とりどりの長い布を、暑さよけにかぶっている。



ダイ人になるとさらにハッキリしない。というより、もう特徴的な姿はあまりみられないといった方が正確なかもしれない。このチュイチャンバーでもどこにも属しない服装をしている女性はタイ人とみていいようだ、まず日本の夏の女性の服装と違ってもらえば間違いない。バナナの木や、ヤシの木が無く、それに顔さえみなければ、時に日本へ帰ったのではないかと錯覚を起こすことさえある。

「ラオスの婦人は良く働く。家事はもちろんのこと、カイコの飼育から、機織、ときに農耕さえやる」とピエンチャンの亭主がへんな自慢をしていたのを思い出した。ラオスにかぎらず、タイでも、カンボジアでも、ベトナムでも、とにかく女性の働く姿はよくみかける。チュイチャンバーでも農閑期だったせいかもしれないが、男性の方がノンビリ昼寝を楽しむ姿が多く目についた。

マレー人の特徴ある帽子にみとれていると、案内の大使館の人がもう帰る時刻だという。

川蒸気グラスの渡し船に乗ってトンレサソブ川を横切ると、カンボジア第一という三、〇〇〇トン級の船がブノンベン港に泊っていた。

二月三日 メコンの川筋の各所で意外に反響の大きかったのは日本のミノチープームだった。ラ

オスでもタイでもベトナムでも、日本の次の天皇が妃を平民からもらうことをきめたことは、いまだに貴族政治、軍人政治が続いているこれらの国々にとって、驚異だったようである。とくにカンボジアではブノンペンで発行されている「デベッシ」と呼ぶフランス語の新聞が、日本の皇太子の納采の儀を、五段抜きぐらいのご両人の写真をのせて報道していた。これにはわけがある。ちょうどこの二月はじめに、カンボジアの首相であり、この国の実力第一人者であるシアヌーク殿下の愛娘で、今年とって一六歳のポバデビ姫が、二四歳の同じ王族のノロドム・ノリラチボン殿下と、口本より一足おさきに結婚されるからである。

ノリラチボン殿下は建築技師だが、この結婚式が異例の宮中で行われることになったことから、次の国王はこの人と側近筋は固く信じている。つまり期せずして同じ筋書の事象がこの国にもあったからである。だがこの国の若い官吏は「カンボジアも次の時代には、日本のようにならなければならない」と、ひそかに「情熱」をもやしていた。

ブノンペンで、日本ブームは静かに高まってきている。最近日本大使館が日本語学校を開校したところ、予定の募集人員が一五〇人なのに、一、〇〇〇人も応募してきて、大使館を面食らわせた。ブノンペンの唯一の女子高校の生徒は五〇〇人だが、そのうち四五〇人までが押寄せるといふ騒ぎ

もあったからである。結局カンボジアの文部省に依頼して、定員通り一五〇人を選抜、月、水、金に週一回ずつ、三組に分けて一日二時間ずつ開校している。

この学校の先生が、カンボジアで唯一人、戦時中から在住する鈴木重成さんである。鈴木さんは東京上野の美術学校出身、昭和一九年、外務省の外郭団体である日本文化会館から派遣されてハノイに行くはずだったが、船の関係でブノンペンに来てそのまま落ち着いてしまった。昭和二三年からこの国の美術学校で洋画の先生をしている。「カンボジア人はおとなしい。日本にも親しみを持っている。しかし文化、生活様式のすべてが、紀元七、八世紀のクメール王朝の時代でストップしたまま、これを改革することは容易でない」と一人の日本人教師の力の弱さをなげいていた。

いまひとり、吉岡大使が「是非会え」とすすめた人に、偶然大使館の玄関でバッタリ会うことができた。北海道出身の磯村厚誌さん（六七）だ。ブノンペンから約一二〇キロ、エレファン山脈のボゴールというところにある、ブレアシアヌーク農園で、夫妻で、約二〇人のカンボジア農民の指導に当たっている。

労働社会省に直属する農園なんだが、海拔約一、〇〇〇メートルの大変なところにある。象もいる。虎も農園のメンバーだといったところ。農園から四〇キロのカンボトの街との間には一軒の

住家もない。食糧はもちろんのこと、郵便、電報でもカンボットまで行って受け取らねばならぬというところだ。

磯村さん夫婦がここに住みついたのは、いまから約二年前、ここに日本から持ってきたミカン、リンゴ、モモ、ビワなどを植えたほか、五ヘクタールほどの農園に大根、白菜をはじめ温帯野菜の栽培を行なっている。

カンボジア人も磯村さんの性格になついて、彼等としては良く働いている。ところがいまから半年ほど前、使っていた農民の二人が強盗に早変わりして、磯村さんに猟銃をむけておどしてきた。磯村さんのところにやってくる前にすでに通訳を殺していたのだった。が、幸い猟銃は不発に終わって、強盗は金を奪っただけで逃亡した。磯村さんは奇跡の命びろいをしたわけである。

磯村さんはシンガポールの付近で三〇年間ゴムの栽培をやっていたという経験の持主だけにこれにも屈しなかった。彼が農園をあずかってから、その経理もハッキリしてカンボジア政府も喜んでいゝという。

ブンベンにはいま一人、変り種が来ている。戦時中サイゴンの司令官だった元陸軍中将の馬奈木敬信氏である。シアヌーク首相の伯母さんに当るラスミ殿下を社長にあおいで、クメール商工業

企業会社を日カン合併で設立、タイ湾に面したコンボンソムの対岸、チュックというところでラワン材の伐材をやっている。一時、運搬用具、器材などのため一億円以上をつぎこみ、経営に苦しんでいたが、最近二万立方メートル（約七万石）の伐材の許可が出て、やっと一息ついたところ。約一〇人の日本人が一緒に働いている。

カンボジア大使館の調べでは、カンボジアの日本人は約六〇人、大半が商社のビジネスマン、ここには残留兵はいないようだ。夜、去る一二日羽田を出発して以来はじめて風呂というものに入った。商社の人たちが宿舎に作ったものだが、本当に生きかえたような感じがした。わたしは本来風呂好きだが、これほど風呂が人間を元気づけるものとはいままで気付かなかった。"カンボジア温泉"のニノクネームを進呈した。

二月四日 プノンペンから約二四〇キロ、汽車で五時間のところにある、この国第二の大都會、バタンバンで日本人がこの国の米の育種と取組んでいるということを聞いて思い切って出掛けることにした。朝まだ夜の明けぬうちにプノンペン駅にかけつけた。バタンバン行急行は三両編成のディーゼルカーだ。特別と普通の二階級、一等のお客は一〇名足らずだった。一等といっても、

客車の中で客が持ちこんだニワトリが「コケコッコ」とトキをつくるのだから、車内の風景は大體察してただけようというものである。急行といってもあまり停車しないだけ。一時間約四五キロから五〇キロ程度の速度で走る。それでもこしばらく列車というものに乗ったことが無かったから、急に自分が文明化したような気持になるから不思議だ。

日本人の技術者でメコンの米と取組んで研究を続けているのは、以前石川県の農業試験場長だった佐藤幸平氏である。その佐藤さんが大使館からの連絡でバタンバン駅に迎えて下さったのには非常に感激した。聞けばメコン川調査団の一班が昨日ここを訪れ、シェームリーフに向かつてけさ出発したという。

佐藤さんは米の育種とともに三〇年間生きてきた人である。ここでも日本の米や台湾のホーライ米と現地の米とを交配させて、新しいカンボジアに適した米を作る仕事と取り組んでいた。

早速その話を聞いてみる。佐藤さんのみるところでは、いわゆる理想の品種を作ることとはそうむずかしいことではない。例えば、日本のモミをそのまま使えば、ただ増産ということでは、すでに理想に近い品種なのである。この付近の田の収量は反当り、五斗ないし八斗だから、それをすぐにも倍にすることはできる。しかし日本の米のようにネバネバしたのをこちらの人は好まない。そ

れに日本種は丸味をおびているのだが、カンボジア人は細長い米を愛好する。この付近のお百姓は一度植付けをするとは何もしない。除草はもちろん、中耕などということも知らない。植えたあとにはもう収穫を待つだけである。だから増産ということだけからいえば、まず除草と中耕を教えさえすればよいということにもなる。

だが、佐藤さんのやっているのはもうひとつ基本的なことだった。現地の人々が何時かは見習うようにと、二、三人の若いカンボジア人を助手にして稲の寸法を測ったり、モミのつき具合を調べたり。新しい品種を作るには最低一〇年はかかる。しかし佐藤さんの任期は三年である。そこで稲の穂を一年に三回出させる方法をやっている。

このあたりの年平均温度は三〇度ぐらい。温度の点では申し分はない。稲は温帯では日照時間の短くなる秋に稔る。これを利用して太陽に当る時間を一日に二時間から四時間ぐらい制限する。暗い部屋を作っておいて稲を植えたハチを、外に遅く出し、夕方は早くしまふ。すると普通なら穂を出すまでに二〇〇日かかるのを一〇〇日ぐらいに短縮することができる。日本の専門家の間ではそう珍しい方法ではないが、現地の人はこの佐藤さんの作業を見てビックリ。佐藤さんが実験場に行っている、農事試験場の場長が早速これを見習って、同じような実験をやっている。

佐藤さんに案内してもらって、バタンバンから四〇キロのところにある、この国が理想開拓村と自慢するシアヌーク農場をみた。除隊兵を集めて新しい農法をやらせるといのがこのネライのようだったが、残念ながら、米の運搬に牛車の代りにトラクター様のものを使っているほかは、機械らしいものにはお目にかからなかった。

現在は一二八家族が入植していて、一戸当り五ヘクタールずつ耕やしている。場長が「広いだろう」と自慢する田んぼでは稲刈りの真最中だった。もっとも、稲刈りといっても日本とは大分ちがう。ここでは穂をつみとるだけ、しかも稲が全部倒れてしまっているので、まるで落穂ひろいといったかっこうだった。

あるところでは脱穀をやっていた。これがまた昔からのしきたりそのものだ。穂のタバを、ちょうど相撲の土俵のように高さ一メートルぐらいに積み上げる。そのうえを二、三頭の牛がグルグル回れば、牛の踏む力でモミが穂から取れるという仕組みである。

この付近では普通七月ごろ植付け、一月ないし二月に収穫がある。八月になるとメコン川が増水し、トンレサップ湖がむくむくとふくれ上る。乾季なら、湖の岸から一〇〇キロ近くもあるこの農場にも深さ二メートルぐらいの水がくる。内地なら差当り冠水ということになるのだが、そこは良



くしたもので、この稲は二メートル以上にのびるので、水の上にぶかぶか浮びながら穂を出す。有名な浮き稲という奴だ。だから乾季になると穂がのびすぎていたのでバッタリ倒れてしまうのである。

佐藤さんからいろいろの話聞いた。日本の商社が、肥料や脱穀機を売り込もうと努力してみたが、農民はテンデ受けようとしなない。肥料をやってもどうせ浸水するので、誰の田にやったかわからなくなる。穂を短かく刈るので日本式の脱穀機は役に立たぬというわけだ。

佐藤さんが一年半前にバタタンバンに来た時は、このあたりでただ一人の日本人だった。フランス語もカンボジア語もできなかった。オシと同然である。一切を手まね足まねで用を足した。いまでもただ一人である。でも、もう片言ながらカンボジア語も話せるようになった。フランス語も「五〇の手習いです」と笑いながら若いカンボジア人に個人教授を受けていた。「いや、やっぱりかなり強い望郷ノイローゼにかかっていたんです。日本に帰りたい。せめてブノンペンに四、五日行って日本人とゆっくり話しあってみたいと思っていました。でも貴方にきてもらってノイローゼはふっ飛びました。頑張ります」といわれた時には本当にうれしかった。佐藤さんと夜のふけるのも忘れて日本のこと、東京のことを話しあった。

二月五日　バタンバンをまだ夜のあけぬうちに出発した。ブノンペンに帰ったのは正午すぎだった。あすはもうブノンペンをはなれなければならないので街を見物する。とにかくカンボジアという国はメコンの沿岸の諸国の中ではユニークな存在だ。ベトナム、ラオス、タイの三国はいずれも反共陣営ということをはッキリしているのに対し、ここは中立政策をとっている。それが街の風景にもニジミ出ている。早い話が中共商品の進出はすさまじいばかり。例えばいままで日本の得意種目だった陶器、ガラス、綿布（ただし安物）は完全に中共にノックアウトを食っている。そういうえば昨夜佐藤さんに連れられて会ったバタン州の副知事は、中共製の高級タバコをすすめてくれた。コンボンチャムでは日本でおなじみの中共商品展が開かれていると新聞にデカデカと書かれてもいる。街で上映されている映画も大半が中共の映画だ。

この国のタケオというところにある国立の種畜場では、中共の援助で建てられた家禽舎に、アメリカの援助資金で日本から買ったニワトリがいる。フランスが港を作れば、アメリカは道路を建設する。いまブノンペン市最大の工事は病院だが、これはソ連からの贈物である。このほか中共は「鉄鋼資源の開発を援助してやる」と話をすすめている。日本も遅ればせながら農業センターを寄贈するという。ベトナム政府のお役人が「カンボジアの中立政策とは、あらゆる国から援助をしても

らうことだ」と笑っていたのを思い出した。

調査団のAグループがブノンベンに集った。彼等はあすバンコックに向う。わたしはサイゴンの街をもういちど見たかったので、サイゴン經由バンコックということにした。調査団を離れて自分で手続きを試みるとなかなか面倒なものだ。

夜、カンボジアのお役人と会食をする。席上、この国のお坊さんの権威についての話が出た。わたしはボタンバンに行った時の経験を話した。というのはこの国の列車には必ず坊さん専用の客車がついている。他の車は鈴なりなのに、この専用車には二、三人のお坊さんがゆうぜんと乗っているだけ。これだけでもこの国の坊さんの勢力がわかるうというものだが、カンボジアの若いお役人にわたしはこういった。「日本には昔、『加茂川の水と叡山の僧だけは朕の意のままにならぬ』となげいた天皇がいた。どうもわたしたち外国人から見るとメコン河と坊さんの勢力がカンボジアのなげきじゃないかね」。

若いお役人は如何にももっともといった顔をしながら、怒りもせずわたしの話を聞いていた。

二月六日 午後二時過ぎの飛行機でサイゴンに向った。サイゴンの飛行場を出てみると軒なみべ

トナム政府の旗の立っているのには面食らった。街に入って見ると、すべての店が休業。食堂も休みなので弱ってしまった。旧正月にぶつかったからである。

できるだけメコンの下流を見たいと思ってシロロンを抜けてミイトオの方向に車を走らせた。さすがはベトナムの穀倉地帯である。農家もなかなか裕福そうだ。クリークに沿って華商の所有する穀物倉庫があちこちにそびえている。スクーターが流行し始めているらしい。例のベトナム服に着かざった娘さんに乗せて、さっそうとシロロンに映画見物に出掛ける若い農夫にとどき出会う。

夜、ベトナム人の貿易商の家でベトナム料理のごちそうになった。最初はビクビクものだったが食べてみるとなかなかオツなもの。

二月七日 旧正月で官庁も全部休み。政府のお役人に会うこともできぬので仕事はすべてあきらめてピエンホアに車を走らせた。漆器のよいものができるところである。その作品はなかなか立派だった。日本でもこんな精巧なものあまり無いだろう。

それよりも気持良かったのは、これまでながめてきた荒涼とした風景と異なり、木々の緑はささ、バナナ、ヤシがみのり、とにかく目を楽しませてくれたことである。夜、バンコック行きの飛行機

に乗る。バンコックの市内、調査団が宿舎にしているホテルに到着したのは十二時近かつたのだ。

調査団はあす朝早くから市内の見物に出掛けるという。それに同行することを約束して床についた。ここには風呂もある。久しぶりにアカを落してグノスリねむってしまった。

二月八日 まずフローティングマーケットをみるのだと四時半にたたき起こされた。

まだ夜は明けきっていない。タイ国政府の提供してくれたランチで、メナム川をさかのぼる。この川にかかっている二つの橋がいずれも日本が戦後建設したものだと聞いて気を良くした。間もなく夜があけた。タイ国海軍の潜水艦や巡洋艦も泊っている。メナム川はこの国の軍港でもあるわけだ。ワットアルンに上陸する。なるほど暁の寺と呼ばれるだけあって、朝日に照りはえた高さ七四メートルの塔は実にすばらしい。もつとも離れて見た時は美しく刻まれた石の集まりのように見えるが、実はレンガとセメントでできていることが近ずいてみてわかり、少しがっかりした。遠くからみてキラキラ光るのは、破損した陶器や茶碗、皿などをぬりつけたものだった。

朝食後王城を見物する。特に横から入れてもらったところは、中央のチャックリー宮殿の前だっ

た。イギリス人技師の設計になるタイ、イタリア両建築のすばらしい融和といわれている。門外漢のわたしにはもちろんのその良さははっきりわからないが、なにかひとつの文化の粋が生んだ産物であるといった程度の理解はできた。

久方ぶりに久保田団長に再会し、昼食をとみにした。久保田さんは、われわれはトラにもお目にかかった。土人の家にも泊った。あなたがわれわれの方に来たら面白い話がかけたのにとくやしがりさせた。

調査団は午後から早速報告書の作成にかかるという。わたしも、旅行記をまとめなければならぬ。

ここでもういちどメコン川についてふりかえてみよう。メコン川は一言にしていえば不思議な川だ。これほど真実の姿がつかめていない川も少いだらう。例えばその長さだが、一般の定評では一応四、二〇〇キロとなっているのだが、現地に来てみると四、五〇〇キロという説もある。四、二〇〇キロとすれば揚子江、アムール、レナ川に次いでアジアで四番目の川ということになるが、四、二〇〇キロとなればアジア第二の河である。長さでもこの程度だから流域の地形などもハッキリしないところが多かった。

こんどの調査にあたって各国とも十万分の一、二五万分の一の地図を提供してくれたのだが、必ずしも現実の姿と一致しなかった。例えばルアンプラバンの上流、ナムオウ川、ナムター川の付近でも山のかっこうが地図と一致しなかったり、川の流れがちがっていたりした。そのため飛行機が自分の飛んでいる場所がわからなくなるといふ珍事さえあった。こういった川の開発計画をまとめることはなかなか容易でない。調査団はどんな報告書を作ることだろうか。

二月九日 午前中に大使館を訪れた。大使館の一隅に東南アジアで唯一とつ日本人小学校があって、在留邦人の子供たち約八〇人に日本式の教育方法で勉強させていた。大使館の調べでは、タイにいる日本人は約七〇〇人、大半がバンコックに集まっていてここには日本人経営の旅館、料理屋からキャバレーまである。七〇〇人の中には戦後もそのまま居ついていた元日本兵が五〇人ほどいるそうだ。なかには国際結婚をして、タイ国籍を持っている者も少くないという。

こんどの調査で、うれしい半面にもなやまさされたのは子供だった。あの町、この村に到着すると必ず「ワッ」と子供がよってくる。しかしこのたくさんの子供たちの教育にはどの国も頭を痛めているようだった。ラオスの首都ビエンチャンには出迎えに自家用車がズラリとならぶフランス系の

名門校があった。しかし全般的にはお粗末な施設が多い。この国では義務教育の制度はとられていない。ピエンチャンを離れると学校らしい学校はなかった。

これにくらべるとタイの学校はチャンとしている。小学校の義務教育が行われているだけにどんな田舎へ行っても、村のまんなかにも学校がある。村でいちばん立派な建物は小学校ときまっていた。「やっぱり、アジアでいちばん古い独立国だと自慢するだけありますなあ」と、これは日本人団員の一致した感想だった。粗末なニッパハウスのなかに、チーク材のシノカリした学校の建物。これがコーラート高原の山の中で、どこにでも見られた村の風景だった。

ベトナム、カンボジアでもまだ義務教育がしかれていない。しかし親たちの教育熱は高まって、それをどう取扱うかが政府の悩みのひとつ。サイゴンでは二部教授、三部教授も珍しくなかった。

メコンの子供たちは球技が好きらしい。お寺の庭でも、川原でも、すこし広いところがあるとすぐバスケットかバレーを楽しんでいる。傑作なのはタイの球技で、タクローと呼ばれている競技だ。バレーのような網をはり、二組に分れて対陣、マリを足でケリあっている。球を地上に落してはいけない。なんのことはない、手の代りに足でやるバレーボールだ。それが実にうまい。手八丁、口八丁というが、タイ国のタクローはまさに足八丁の球技といふべきかもしれない。



二月一〇日 エカフエ（国連アジア極東経済委員会）を訪れる。エカフエはバンコクの目抜き通り、タイ国の国会議事堂とむかいあって立っている。議事堂に負けぬぐらいの堂々たる建物だ。こんどの調査はこの国連の一機関であるエカフエの要請によって行われた。だからわれわれのジープには常に国連の旗がひるがえっていたわけである。

メコン調査は最初ジープの旅を二、〇〇〇キロと予定していた。ところが各国からひっぱりだこである。「こちらを見てください」「あちらを調査してください」とうとう両員の走ったあとを合計すると七、〇〇〇キロ、空からの視察をあわせて総計一万七、〇〇〇キロの旅となった。

だが、ここでまず考えられるのはこの調査、あるいはメコン川の開発のむずかしさである。その第一の理由は四カ国の利害が必ずしも一致していないことだ。例えばタイとカンボジアは国境争いから国交断絶、このタイの首都バンコックには、一応戒厳令がしかれている。しかしその真相は、タイはアジアにおける反共陣営の旗頭をもって自ら任じている。だからカンボジアが中立政策をとって中共と国交を結んでいることが気にくわぬらしい。

ラオスとタイともイザコザが絶えない。国境をなしているメコン川の「川中島」の所属争いである。しかしいちはばんな大きな問題はラオスが海に面していないために、すべての物資がタイ国を通過

して輸入されることだ。おまけに両国の外貨交換率がちがうので密輸が行われる。工場らしい工場もないのにラオスがタイ国に対して電気冷蔵庫や自動車の輸出にさえている。昨年秋、その交換率が変わってからは密輸の流れが逆流し、タイからラオスにヤミの舶来品が流れこむ。川ひとつが国境だけに取締りの仕様がないらしい。

バンコックにきてはじめて知ったのだが、南ベトナムとタイとの間にもモメゴトのあることだ。われわれが走ってきたタイ国の東北部、コーラート高原にはたくさんのベトナム人が住んでいるが、タイ側にいわせると、これらの大半が赤い北ベトナムと気脈を通じているという。だから彼等を北ベトナムに送還したいと望んでいるが、これらのベトナム人は北とも南とも国籍が明らかでない。それを北ベトナムに送還するのはけしからん、というのが南ベトナムのいい分だ。北鮮送還問題と同様のケースといえるだろう。

もっともこんどの調査ではメコン川の開発は四カ国が共通して直面している問題だとよく協力してくれた。今後も調査の段階では、こういった四カ国の対立もそう大きな支障となるとは思えないという見方もある。「しかし開発となると話は別だ」というのが大半の団員がヒシヒシと感じなければならぬ現実のようである。

調査団はご苦労に、暑いバンコックでホテルにたてこもって報告書の作成にいそがしい。

二月一日 東京に送る原稿を書くあい間を利用してバンコックのお寺巡りをすることにした。マール・テンブルを訪れた。正しくはワットベンチャマボビットというそうだが、およそ七〇年ほど前、チュラロンコーン王が、イタリアの建築家に依頼し、イタリアの大理石を使って建てられたのでこの名がある。白いカベに配する赤と金のコトラスト、その間に南の国の樹が茂っている。ある意味では非常にモダンな建て方だ。しかしやはりお寺はお寺、どことなくマッコウくささはかくせない。案内の人がいちいち中の仏像を丁寧に説明してくれたが、ほとんど頭に残らない。ただひとつ「これは日本から来たもの」という言葉だけちよいと興をそそった程度だった。

次に訪れたのがブーカオットーン（金の山の意）の丘、頂上に通ずるまがりくねった途中には、無数の洞穴があり、仏像が安置されてある。この頂上から見渡せるバンコックのなごめは実にすばらしかった。

バンコックには日本人の観光客が実に多い。もちろん貧乏国日本のことだから純粹の観光客ではない。商用のあとであちらこちらと見物して回る者、あるいは国際会議を名目に国を飛び出して来

た人たちである。パンコックのお寺巡りをしていると大抵こういった人に一人や二人会う。それが例外なしにメガネをかけ、カメラを持っている。「メガネをかけ、カメラを持っていたら日本人と思え」と何かに書いていた外人記者の記事は、実によく日本人の一面をキヤッチしていると、妙なところで感心させられた。

二月一二日 やつと報告書ができ上った。しかしこれはあくまで要約である。正式な報告書はもちろん日本に帰ってから作成される。

調査団が調べた河川は数えてみると三四河川にもほった。よくもこれだけ調べたものだと、われながら感心する。メコン川の実体はこれまで全くナゾにつつまれていた。科学のメスが加えられてなかったので、実情をつかむ資料もない。調査団一行はこの点でもかなりの成果をあげることができたようである。たとえばメコン川の七次支流の流量と流速を測定した結果、本流における雨季の流量を推定する手がかりもつくった。メコンの本流はビエンチャン付近で一分開一、一〇〇立方メートルだ。ところがセコン、セサン、スレギクの三つの支流の流量だけでも八〇〇立方メートル、結論はメコンのはんらんは支流を調節することによってかなり防げるということである。

電源地帯として数多くの有望地点を発見したこともいうまでもない。このほかメコンの本流をコ  
ーラート高原にみちびけば、かなりのカンガイ地域が生れ、新しい耕作可能地域が生じること  
もわかった。

メコン川のはんらんをおさえ、電源の宝庫とすることは技術的にだけみた場合、決して不可能で  
ないことはこの報告書だけみても明らかなことである。おそらくいつの日か必ず開発されることだ  
ろう。日本もできるだけ協力しなければなるまい。だが問題はその資金だ。政治問題ももちろんあ  
る。エカフェで東南アジアの経済について研究している東京都立大学の喜多村教授はこういつた。  
「エカフェには中共はもちろんまだ加盟していない。しかし中共を無視して、あすのメコンの開発  
を論じることはいえない」と。メコンの流れにも「二つの世界」の波が押寄せているといえよう。

白 木 竜 雄

(朝日新聞社会部記者)

——經濟技術協力叢書 V——

メコン河開發の調査と計画

---

昭和 35 年 2 月 25 日 発行

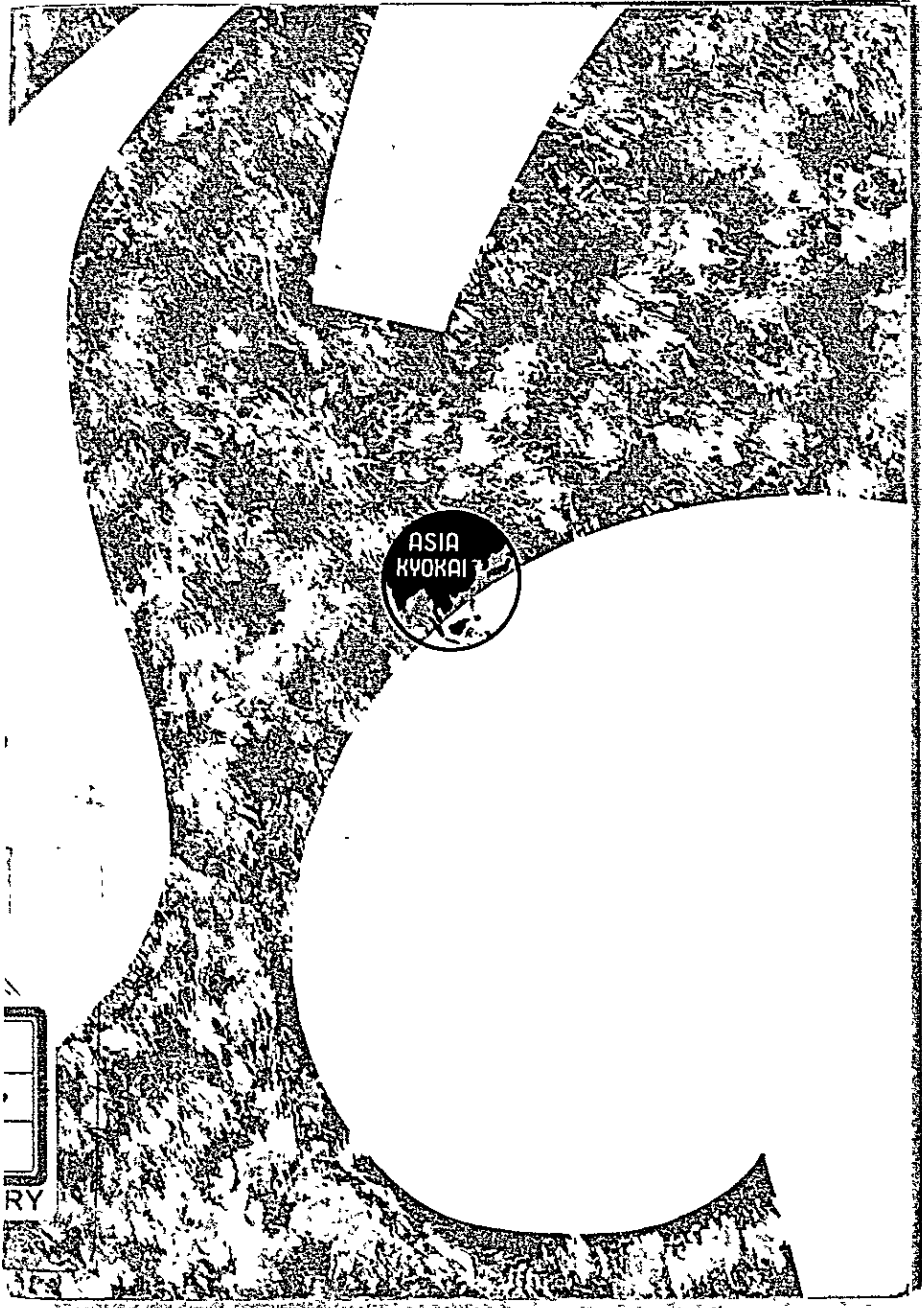
編集兼発行者 社団法人 アジア協会

発行所 社団法人 アジア協会  
東京都港区赤坂新坂町 37  
電話(408)4261(代表)~8

印刷者 創文印刷工業株式会社  
東京都荒川区尾久町3-2154  
電話 (801) 3 6 9 2

非売品

---



ASIA  
KYOKAI

RY